期　日　二〇二五年十月十二日（日）・十三日（月）
会　場　九州大学　伊都キャンパス（イーストゾーン）

# 日本中国学会　第七十七回大会要項

日本中国学会

# 大会参加費等のお支払いについて

今年度の大会参加費は、郵便振替票による納入ではなく、原則としてオンライン決済のみで行います。

## 1．大会参加費のお支払い方法

下記、QR コードを読み取って頂き、**9月16日（火）まで**にお支払い下さい。クレジットカードのほか、Google Pay、Apple Pay でのお支払いが可能です。締め切り日以降は、対応できないことがございますので、ご注意ください。

大会参加費は一律3,000円です。なお、司会者・報告者におかれましても大会参加費が必要です。

初日のお弁当（1,500円）もこちらからお申し込みください。

領収書につきましては、システム上での発行に代えさせて頂き、会場では発行いたしません。

【大会参加費お支払い QR コード】
https://app.payvent.net/embedded_forms/show/685f50e04520763ca23af63e

※キャンパス内の食堂やコンビニは営業していません。キャンパス周辺に飲食店はありません。

## 2．懇親会のお申し込みと懇親会費のお支払い方法

懇親会のお申し込みは、以下の QR コードから**9月16日（火）まで**にお手続きをお済ませください。

【懇親会出席申し込み QR コード】
https://forms.gle/eY4kGM9ShTDBV29q9

懇親会費は当日受付でお支払い下さい。

一　　般：8,000円
学　　生：7,000円
当日参加：9,000円

【大会準備会問い合せ先】
2025japansinology@gmail.com

拝啓

時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、来る十月十二日（日）及び十三日（月・祝）の両日、日本中国学会第七十七回大会を九州大学伊都キャンパスにて開催致します。万障お繰り合わせの上、ご参加くださいますようご案内申し上げます。

ご参加の方は、右記の案内より、二〇二五年九月十六日（火）までに、参加費等をお振り込みください。昨年同様、右ページのＱＲコードを読み取り、オンライン決済によるお手続きとなります。

また、今年度の大会は全て対面で行います。皆様のご参加を心よりお待ち申し上げております。

敬具

二〇二五年八月十日

日本中国学会理事長　小島　毅

第七十七回大会準備会代表　東　英寿

会員各位

# 日本中国学会第七十七回大会

2025年10月12日（日）・13日（月・祝）

| 日 | 時 | 行　事 | 開催方式 |
|---|---|---|---|
| 11日（土） | 13：00 | 理事会 | 1号館2階　E-A-239会議室 |
| | 15：00 | 評議員会 | 1号館2階　E-A-239会議室 |
| 12日（日） | 9：30 | **受付開始** | 1号館ロビー |
| | 10：00 | **開会式** | 大講義室Ⅰ |
| | 10：15〜12：15 | **研究発表**<br>Ⅰ．哲学・思想部会（A）<br>Ⅱ．哲学・思想部会（B）<br>歴史部会<br>Ⅲ．日本漢学部会（A）<br>Ⅳ．文学・語学部会（A）<br>Ⅴ．文学・語学部会（B）<br>日本漢学部会（B）<br>Ⅵ．**次世代シンポジウム** | <br>第一会場　2号館 D-105教室<br>第二会場　1号館 A-117教室<br><br>第三会場　1号館 B-101教室<br>第四会場　2号館 D-103教室<br>第五会場　1号館 A-118教室<br><br>第六会場　1号館 B-112教室 |
| | 12：15〜13：30 | **写真撮影、昼休憩**<br>**理事・各種委員会委員懇談会**<br>**展示会ギャラリートーク**（13時〜） | 第五会場前（写真撮影）<br>1号館2階　E-A-239会議室<br>フジイ・ギャラリー |
| | 13：30〜16：15 | **研究発表**<br>**書評シンポジウム　パネルⅠ**<br>Ⅰ．哲学・思想部会（A）<br>Ⅱ．哲学・思想部会（B）<br>Ⅲ．日本漢学部会（A）<br>Ⅳ．文学・語学部会（A）<br>Ⅴ．文学・語学部会（B）<br>日本漢学部会（B）<br>Ⅵ．文学・語学部会（C） | <br>大講義室Ⅰ<br>第一会場　2号館 D-105教室<br>第二会場　1号館 A-117教室<br>第三会場　1号館 B-101教室<br>第四会場　2号館 D-103教室<br>第五会場　1号館 A-118教室<br><br>第六会場　1号館 B-112教室 |
| | 16：15 | **総会** | 大講義室Ⅰ |
| | 18：30 | **懇親会** | KKRホテル博多 |
| 13日（月・祝） | 9：00 | **受付開始** | 1号館ロビー |
| | 9：30〜12：45 | **研究発表**<br>**書評シンポジウム　パネルⅡ**<br>Ⅰ．哲学・思想部会（A）<br>歴史部会<br>Ⅲ．日本漢学部会（A）<br>文学・語学部会（D）<br>Ⅳ．文学・語学部会（A）<br>Ⅴ．文学・語学部会（B）<br>Ⅵ．文学・語学部会（C） | <br>大講義室Ⅰ<br>第一会場　2号館 D-105教室<br><br>第三会場　1号館 B-101教室<br><br>第四会場　2号館 D-103教室<br>第五会場　1号館 A-118教室<br>第六会場　1号館 B-112教室 |
| | 12：45 | **閉会式** | 第四会場　2号館 D-103教室 |

★復路、学会専用バスのご案内

＊1日目は総会終了後に、懇親会会場KKRホテル博多まで運行。最寄りの地下鉄駅は薬院大通。（懇親会の出欠にかかわらず乗車可）

＊2日目は閉会式終了後に、JR博多駅まで運行。所要時間は40分〜1時間程度。

# 会場のご案内

**◆大会会場**

九州大学伊都キャンパス、イースト１号館・２号館

**◆「九州大学100年の中国学研究」展示会場**

フジイ・ギャラリー

**◆大会本部**

１号館２階　E-A-239会議室（学会事務局）

**◆休憩室**

１号館 B-105教室

**◆当日受付／クローク**

受　　付　　１号館ロビー

クローク　　B-106教室

※12日（日）の荷物預かりは、午後５時で終了致します。総会終了後ただちにお引き取りをお願い致します。

**◆書店・出版社展示**

大講義室Ⅰ入口の学生サロン

# 会場・時間帯一覧表

| 第３会場 B-101 | 第４会場 D-103 | 第５会場 A-118 | 第６会場 B-112 |
|---|---|---|---|
| 日本漢学部会(A) | 文学・語学部会(A) | 文学・語学部会(B)<br>日本漢学部会(B) | 文学・語学部会(C) |
| | | | |
| 3-1　中西望月 | 4-1　土屋聡 | 5-1　井上浩一 | 【次世代シンポジウム】<br>濱田麻矢<br>阿部沙織<br>宋新亜<br>林麗婷 |
| 3-2　劉書鈺 | 4-2　劉瑨旖 | 5-2　孫琳浄 | |
| 3-3　荒川兼汰 | 4-3　髙崎駿士 | 5-3　劉佳佳 | |
| 3-4　廖嘉祈 | 4-4　鈴木政光 | 5-4　上原徳子 | |
| | | | |
| 3-5　太田亨 | 4-5　黒瀬加那子 | 5-5　陳恵陽 | 6-5　稲森雅子 |
| 3-6　湯青妹 | 4-6　福原早希 | 5-6　姚依平 | 6-6　楊文溢 |
| 3-7　武石智典 | 4-7　柴田寿真 | 5-7　薄鋒 | 6-7　福家道信 |
| | | | |
| 3-8　王怡静 | 4-8　仲村康太郎 | 5-8　汪憶霏 | 6-8　閻瑜 |
| 3-9　杜絡嘉 | | 5-9　孫平 | 6-9　楊婷婷 |
| | | | |
| 最寄りの地下鉄駅は薬院大通。懇親会の出欠にかかわらず乗車可。 | | | |
| | | | |

| 第３会場 B-101 | 第４会場 D-103 | 第５会場 A-118 | 第６会場 B-112 |
|---|---|---|---|
| 日本漢学部会(A)<br>文学・語学部会(D) | 文学・語学部会(A) | 文学・語学部会(B) | 文学・語学部会(C) |
| | 4-11　甲斐雄一 | | 6-11　武小萱 |
| 3-12　劉孟磊 | 4-12　張亜琳 | | 6-12　林雨璐 |
| 3-13　馬艶艶 | 4-13　黄嘉欣 | | 6-13　李慕遥 |
| | | | |
| 3-14　原田愛 | 4-14　鮑功瀚 | 5-14　蔺豪 | 6-14　黄嘉慶 |
| 3-15　鄭瑞雪 | 4-15　呉修喆 | 5-15　宋元祺 | 6-15　胡勝 |
| 3-16　岩本眞理 | 4-16　静永健 | 5-16　龔月婷 | 6-16　黄詩琦 |
| | | | |
| | | | |

◆ご案内
・キャンパス内は全面禁煙です。ご協力をお願い致します。
・キャンパス内の食堂やコンビニは営業していません。キャンパス周辺に飲食店はありません。
・１日目昼休憩時、理事・各種委員会委員懇談会の出席者には昼食弁当が支給されますので、お申し込み頂くには及びません。
・13日（月）は午後１時に終了予定です。２日目の昼食弁当の手配はありません。
・託児に関しては巻末の案内を御覧下さい。

# 会場・時間帯一覧表

| | 会場／時間 | 大講義室Ⅰ | 第１会場 D-105 | 第２会場 A-117 |
|---|---|---|---|---|
| | | | 哲学・思想部会（A） | 哲学・思想部会（B）<br>歴史部会 |
| 12日（日） | 10：00～10：10 | 【開会式】大講義室Ⅰ | | |
| | 10：15～10：45 | | 1-1　莫寒 | 2-1　井澤耕一 |
| | 10：45～11：15 | | 1-2　程雪茹 | 2-2　末木恭彦 |
| | 11：15～11：45 | | 1-3　楢崎洋一郎 | 2-3　大森幹太 |
| | 11：45～12：15 | | 1-4　路勝楠 | 2-4　佐藤大朗 |
| | | 【写真撮影の後、昼休憩】<br>【展示会ギャラリートーク】（静永）フジイ・ギャラリー | | |
| | 13：30～14：00 | 【書評シンポジウム】<br>パネルⅠ<br>鈴木将久<br>神谷まり子<br>田中雄大<br>笠見弥生<br>竹元規人 | 1-5　劉如玉 | 2-5　胡華喻 |
| | 14：00～14：30 | | 1-6　凌玲 | 2-6　潘虹智 |
| | 14：30～15：00 | | 1-7　呉雨桐 | 2-7　志村敦弘 |
| | | | 【休　憩】15分 | |
| | 15：15～15：45 | | 1-8　阿久津光貴 | 2-8　田村有見恵 |
| | 15：45～16：15 | | 1-9　吉岡佑馬 | 2-9　松原えみ |
| | 16：15～17：15 | 【総　会】大講義室Ⅰ | | |
| | | 総会終了後、学会専用バス出発、KKR ホテル博多まで。 | | |
| | 18：30～ | 【懇親会】KKR ホテル博多 | | |

| | 会場／時間 | 大講義室Ⅰ | 第１会場 D-105 | |
|---|---|---|---|---|
| | | | 哲学・思想部会（A）<br>歴史部会 | |
| 13日（月・祝） | 9：30～10：00 | 【書評シンポジウム】<br>パネルⅡ<br>尾崎順一郎<br>石運<br>黒田秀教<br>松川雅信<br>白石將人 | | |
| | 10：00～10：30 | | 1-12　竹宮英朗 | |
| | 10：30～11：00 | | 1-13　徐正丁 | |
| | | | 【休　憩】15分 | |
| | 11：15～11：45 | | | |
| | 11：45～12：15 | | 1-15　劉明鍇 | |
| | 12：15～12：45 | | 1-16　夏雨、李雨珊 | |
| | 12：45～12：55 | 【閉会式】第４会場 D-103 | | |
| | | 閉会式終了後、学会専用バス出発、ＪＲ博多駅まで。 | | |

◆諸会費
- 大会参加費　3,000円
- 懇親会参加費　8,000円（学生 7,000円、当日 9,000円）
- 昼食弁当代　1,500円（初日のみ）

# 日本中国学会第七十七回大会プログラム

## Ⅰ　哲学・思想部会（A）、歴史部会（第一会場　二号館　D―一〇五教室）

十月十二日（日）午前

1―1　儒家の「積善」と道家の「積徳」――文言伝における坤卦初六の解釋を中心に　（十時十五分～十時四十五分）

莫　寒（北海道大学大学院）

司会　緒形　賢一（愛知大学）

1―2　敦煌写本『孝経鄭注義疏』（P.3274）の再検討　（十時四十五分～十一時十五分）

程　雪茹（東京大学大学院）

司会　末永　高康（広島大学）

1―3　天籟説話に関する一考察――「隠（謎語）」としての側面から　（十一時十五分～十一時四十五分）

楢崎　洋一郎（西南学院大学）

司会　鈴木　達明（愛知教育大学）

1―4　元弘相傳本『五行大義』における『白虎通』の利用――引用形式と異同の検討を通じて　（十一時四十五分～十二時十五分）

路　勝楠（北海道大学）

司会　内山　直樹（千葉大学）

十月十二日（日）午後

1―5　『商君書』「去彊」、「說民」、「弱民」三篇の關係について（十三時三十分～十四時）

劉　如玉（北海道大学大学院）

司会　有馬　卓也（広島大学名誉教授）

1―6　『論衡』亂龍篇における「象類」について――『莊子』齊物論篇を手がかりに（十四時～十四時三十分）

凌　玲（北海道大学大学院）

司会　有馬　卓也（広島大学名誉教授）

1―7　「入山」と「出家」――六朝道教修行者の家庭観念（十四時三十分～十五時）

呉　雨桐（東京大学大学院）

司会　齋藤　智寛（東北大学）

1―8　「名号」と「称謂」から観る「道」――『老子』王弼注における用例を中心に（十五時十五分～十五時四十五分）

阿久津　光貴（大東文化大学大学院）

司会　古勝　隆一（京都大学）

1―9　賈大隱『老子述義』の撰述目的について（十五時四十五分～十六時十五分）

吉岡　佑馬（都城高専）

司会　古勝　隆一（京都大学）

十月十三日（月・祝）午前

1―12　李当之の本草著作に関する一考察（十時～十時三十分）

竹宮　英朗（東京大学大学院）

司会　山田　俊（熊本県立大学）

1―13　黄老思想から『太平經』への展開（十時三十分～十一時）

徐　正丁（北海道大学大学院）

司会　山田　俊（熊本県立大学）

1―15　徐孚遠『釣璜堂存稿』に見る南明の日本乞師と舟山支配（十一時四十五分～十二時十五分）

劉　明鍇（九州大学大学院）

司会　伊東　貴之（国際日本文化研究センター）

1―16　中国古代文献における再発新星（十二時十五分～十二時四十五分）

夏　雨（北九州市立大学）、李　雨珊（中国・太原理工大学）

司会　佐々木　聡（金沢学院大学）

## Ⅱ　哲学・思想部会(B)、歴史部会（第二会場　一号館　A―一一七教室）

十月十二日（日）午前

2―1　陳祥道『論語全解』考――王安石学派の『論語』解釈（十時十五分～十時四十五分）

井澤　耕一（茨城大学）

司会　小島　毅（東京大学）

2―2　「事皆有益」の行方――『論語集注』子張篇第六章の検討（十時四十五分～十一時十五分）

末木　恭彦（独立研究者）

司会　小島　毅（東京大学）

2―3　胡瑗教育活動の思想史的展開――「明体適用」の発言者・劉彝を例として（十一時十五分～十一時四十五分）

大森　幹太（二松学舎大学大学院）

司会　吾妻　重二（関西大学）

2―4　銭大昕の「史学」と『三国志』（十一時四十五分～十二時十五分）

佐藤　大朗（早稲田大学大学院）

司会　竹元　規人（福岡教育大学）

十月十二日（日）午後

2―5　元末明初の江西地域における儒生の科挙出題文適応の考察について（十三時三十分～十四時）

胡　華喩（東京大学大学院）

司会　鶴成　久章（福岡教育大学）

2―6　「聖諭六言」解釈に見る羅近溪の思想と実践（十四時～十四時三十分）

潘　虹智（東北大学大学院）

司会　早坂　俊廣（信州大学）

2―7　王陽明における「見在」の人間像――感情と身体についての議論を手掛かりに（十四時三十分～十五時）

志村　敦弘（東洋大学）

司会　早坂　俊廣（信州大学）

2―8　蘇軾・蘇轍の窮理、尽性、至命の説――王安石の説との比較から（十五時十五分～十五時四十五分）

田村　有見恵（東京都公立学校）

司会　陳　佑真（都留文科大学）

2―9　中国における進化論受容――丘浅次郎の受容を例に（十五時四十五分～十六時十五分）

松原　えみ（東京大学大学院）

司会　手代木　有児（福島大学）

## Ⅲ　日本漢学部会（A）、文学・語学部会（D）（第三会場　一号館　B―一〇一教室）

十月十二日（日）午前

3―1　島津久光の楽府詩について（十時十五分～十時四十五分）

中西　望月（九州大学大学院）

司会　高津　孝（鹿児島大学名誉教授）

3―2　近世琉球における久米村士族の儒教的祖先祭祀の実態とその変遷

――諸家の位牌祭祀と拝礼作法を中心に（十時四十五分～十一時十五分）

劉　書鈺（関西大学）

司会　水上　雅晴（中央大学）

3―3　本朝近世に於ける王覇観（十一時十五分～十一時四十五分）

荒川　兼汰（名古屋大学大学院）

司会　水上　雅晴（中央大学）

3―4　平山行蔵の復讐論――江戸後期における九世復讐説の展開（十一時四十五分～十二時十五分）

廖　嘉祈（東京大学大学院満期退学）

司会　黒田　秀教（福井大学）

十月十二日（日）午後

3―5　義堂周信の文学観について――『東山外集抄』を中心に（十三時三十分～十四時）

太田　亨（広島大学）

司会　堀川　貴司（慶應義塾大学）

3―6　山本北山『古文尚書勤王師』執筆意図考（十四時～十四時三十分）

湯　青妹（九州大学大学院）

司会　堀川　貴司（慶應義塾大学）

3―7　内藤耻叟『論語』爲政篇「異端」解釈と排耶思想について（十四時三十分～十五時）

武石　智典（中国・肇慶学院）

司会　町　泉寿郎（二松学舎大学）

3―8　木下順庵の儒礼思想について――『服制合編』を端緒として（十五時十五分～十五時四十五分）

王　怡静（関西大学大学院）

司会　松川　雅信（神戸市外国語大学）

3―9　伊藤東涯の儒式葬儀と古義堂の人的ネットワーク――『紹述先生易簀雑記』を中心に（十五時四十五分～十六時十五分）

杜　絡嘉（関西大学大学院）

司会　松川　雅信（神戸市外国語大学）

十月十三日（月・祝）午前

3―12　空海の雑言詩における声韻表現についての考察（十時～十時三十分）
劉　孟磊（神戸大学大学院）
司会　齋藤　希史（東京大学）

3―13　服部南郭の詩作に見る『唐詩選』の受容と影響（十時三十分～十一時）
馬　艶艶（岡山大学大学院）
司会　白石　真子（椙山女学園大学）

3―14　日本における蘇軾「和陶詩」の流伝と創作の系譜（十一時十五分～十一時四十五分）
原田　愛（金沢大学）
司会　内山　精也（早稲田大学）

3―15　頼三兄弟による蘇氏兄弟詩の受容――「病中次韻雪詩」を中心に（十一時四十五分～十二時十五分）
鄭　瑞雪（お茶の水女子大学大学院）
司会　内山　精也（早稲田大学）

3―16　唐話資料「三字話」群に関する初歩的考察――所収語彙の異同を中心に（十二時十五分～十二時四十五分）
岩本　眞理（大阪公立大学）
司会　木津　祐子（京都大学）

## Ⅳ　文学・語学部会（A）（第四会場　二号館　D―一〇三教室）

十月十二日（日）午前

4―1　北朝における陶淵明の受容について（十時十五分～十時四十五分）

土屋　聡（岡山大学）

司会　柳川　順子（県立広島大学名誉教授）

4―2　白居易の新楽府における叙述法の工夫――元稹に対する唱和詩という観点から（十時四十五分～十一時十五分）

劉　瑨旖（岡山大学大学院）

司会　柳川　順子（県立広島大学名誉教授）

4―3　唐代詩格にみる正変説の展開（十一時十五分～十一時四十五分）

高崎　駿士（東北大学）

司会　加藤　聰（京都女子大学）

4―4　追憶の文学――温庭筠の詩に見られる「場所」の追憶表現をめぐって（十一時四十五分～十二時十五分）

鈴木　政光（東北大学大学院指導認定退学）

司会　加藤　聰（京都女子大学）

十月十二日（日）午後

4―5　岑参の地方官意識――蜀における五言六句の懐古詩群を中心に（十三時三十分～十四時）

黒瀬　加那子（岡山大学大学院）

司会　高芝　麻子（横浜国立大学）

4―6　司空曙の詩風について――姚合『極玄集』を手掛かりに（十四時～十四時三十分）

福原　早希（筑波大学大学院）

司会　高芝　麻子（横浜国立大学）

4―7　中唐に出現する別号表現の詩について――徒詩における三人称視点の自己描写（十四時三十分～十五時）

柴田　寿真（早稲田大学）

司会　橘　英範（岡山大学）

4―8　〈資料紹介〉釈希一『筆勢集』概述（十五時十五分～十五時四十五分）

仲村　康太郎（京都大学大学院）

司会　菅野　智明（筑波大学）

十月十三日（月・祝）午前

4―11　陸游の連作詩について（九時三十分～十時）

甲斐　雄一（明治大学）

司会　三野　豊浩（愛知大学）

4―12　『草堂詩餘』と明代詞人の創作姿勢――次韻に着目して（十時～十時三十分）

張　亜琳（大阪大学大学院）

司会　藤原　祐子（岡山大学）

4―13　時と音――黄仲則詩の時間表現と時間意識（十時三十分～十一時）

黄　嘉欣（中国・南京大学大学院）

司会　田中　正樹（二松学舎大学）

4―14　紀昀『瀛奎律髄刊誤』の「点」について（十一時十五分～十一時四十五分）

鮑　功瀚（大阪大学大学院）

司会　齋藤　希史（東京大学）

4―15　離合詩と離合体燈謎のあわい――「離合」における修辞的実践（十一時四十五分～十二時十五分）

呉　修喆（九州大学）

司会　野村　鮎子（奈良女子大学名誉教授）

4―16　盲目の詩人唐汝詢は如何に唐詩を読み解いたのか（十二時十五分～十二時四十五分）

静永　健（九州大学）

司会　野村　鮎子（奈良女子大学名誉教授）

## V　文学・語学部会（B）、日本漢学部会（B）（第五会場　一号館　A―一一八教室）

十月十二日（日）午前

5―1　翻訳における原文使用率と、翻訳の質の数値化について

――一九二〇年代から一九四〇年代における西遊記の翻訳を例に（十時十五分～十時四十五分）

井上　浩一（仙台白百合女子大学）

司会　上田　望（金沢大学）

5―2　『八犬伝』における白話語彙の受容と展開――馬琴旧蔵『忠義水滸全書』を手がかりに（十時四十五分～十一時十五分）

孫　琳浄（九州大学）

司会　上田　望（金沢大学）

5―3　川合仲象『本朝小説』における阿岩の敵討ちについて（十一時十五分～十一時四十五分）

劉　佳佳（岡山大学大学院）

司会　井口　千雪（京都大学）

5―4　明末の小説における「女俠」の状況とその意義（十一時四十五分～十二時十五分）

上原　徳子（立命館大学）

司会　井口　千雪（京都大学）

十月十二日（日）午後

5―5　「水性」と「火性」――明清時期のポルノグラフィーにおける欲望の再検討（十三時三十分～十四時）

陳　恵陽（北海道大学大学院）

司会　田中　智行（大阪大学）

5―6　明清吝嗇譚にみる「汚穢」の描写の諸相（十四時～十四時三十分）

姚　依平（北海道大学大学院）

司会　田中　智行（大阪大学）

5―7　漢詩制作に見る夏目漱石の「静」（十四時三十分～十五時）

薄　鋒（東京大学大学院）

司会　早川　太基（神戸大学）

5―8　中国児童文学の黎明期における児童詩創作の探求――雑誌『児童世界』を中心に（十五時十五分～十五時四十五分）

汪　憶霏（九州大学大学院）

司会　佐々木　睦（東京都立大学）

5―9　中国法制文学の成立と展開――一九八〇年代文芸状況とジャンルの再定位を中心に（十五時四十五分～十六時十五分）

孫　平（長崎外国語大学）

司会　高橋　俊（高知大学）

十月十三日（月・祝）午前

5―14　五〇年代台湾にこだました野性の叫び声――朱西甯「黒狼」の改稿（十一時十五分～十一時四十五分）

藺　豪（神戸大学大学院）

司会　黄　英哲（愛知大学）

5―15　朱西甯『猫』に見る戦後台湾社会――人物設定と場面描写の分析を通して（十一時四十五分～十二時十五分）

宋　元祺（関西学院大学大学院）

司会　黄　英哲（愛知大学）

5―16　戦後初期の台湾文学における女性中心的家族史――徐鐘珮『余音』をめぐる考察（十二時十五分～十二時四十五分）

龔　月婷（名古屋大学大学院）

司会　張　文菁（愛知県立大学）

## Ⅵ　文学・語学部会(C)（第六会場　一号館　B―一一二教室）

十月十二日（日）午前

【次世代シンポジウム】（十時十五分～十二時十五分）

「移動・親密関係・宗教的想像力――許地山作品における女性表象をめぐって」

司　会　濱田　麻矢（神戸大学）

報告者　阿部　沙織（拓殖大学）、宋　新亜（関西学院大学）、林　麗婷（龍谷大学）

十月十二日（日）午後

6―5　周家所蔵目加田誠致周作人書簡等について（十三時三十分～十四時）

稲森　雅子（九州大学）

司会　小川　利康（早稲田大学）

6―6　沈従文の一九四〇年代作品における「不在」の構造――「夢与現実」「摘星録」「看虹録」を中心に（十四時～十四時三十分）

楊　文溢（京都大学大学院）

司会　新谷　秀明（西南学院大学）

6―7　鏡に見る美と歴史と文献――沈従文『唐宋銅鏡』の内容と性格（十四時三十分～十五時）

福家　道信（大阪大学）

司会　新谷　秀明（西南学院大学）

6—8　田漢における厨川白村文芸思想の受容（十五時十五分～十五時四十五分）

閻　瑜（お茶の水女子大学）

司会　大東　和重（関西学院大学）

6—9　近代ジャーナリズム体制下における詩話の変容（十五時四十五分～十六時十五分）

楊　婷婷（大阪大学、同志社大学）

司会　大東　和重（関西学院大学）

十月十三日（月・祝）午前

6—11　科学を担う他者たち——清末科学小説における自他関係の表象分析（九時三十分～十時）

武　小萱（岡山大学大学院）

司会　池田　智恵（関西大学）

6—12　影戯小説の空間構造について——「ポンペイ最後の日」を例として（十時～十時三十分）

林　雨璐（お茶の水女子大学大学院）

司会　池田　智恵（関西大学）

6—13　魯迅「祝福」を読み直す（十時三十分～十一時）

李　慕遥（大阪大学大学院）

司会　伊藤　徳也（東京大学）

6―14　『吶喊』――《声》の構造と狂人の言葉（十一時十五分～十一時四十五分）

黄　嘉慶（東京大学大学院）

司会　鳥谷　まゆみ（北九州市立大学）

6―15　丸山昇の鹿地亘に対する〝朝花夕拾〟――日本における「革命人魯迅」再考（十一時四十五分～十二時十五分）

胡　勝（名古屋大学大学院）

司会　鈴木　将久（東京大学）

6―16　戦後日本における魯迅像――「世界文学」装置を視座とした試論（十二時十五分～十二時四十五分）

黄　詩琦（中国・中山大学）

司会　鈴木　将久（東京大学）

**企画展示「九州大学一〇〇年の中国学研究」**

会　場　九州大学　伊都キャンパス　フジイギャラリー

ギャラリー・トーク　十月十二日（日）午後一時より三〇分間　講師＝九州大学中国文学講座　静永　健

## 書評シンポジウム（大講義室Ⅰ）

十月十二日（日）午後（十三時三十分～十五時三十分）

パネルⅠ　神谷まり子著『野蛮な文明――近代上海の通俗メディアと社会小説』（中国文庫、二〇二三年刊行、二七七頁）

評者：田中　雄大（文京大学、近代中国の詩的言語）

笠見　弥生（高崎経済大学、凌濛初「二拍」を中心とする短篇白話小説）

竹元　規人（福岡教育大学、中国近現代思想史・学術史）

著者：神谷　まり子（日本大学）

司会：鈴木　将久（東京大学）

十月十三日（月・祝）午前（九時三十分～十一時三十分）

パネルⅡ　石運著『十七・十八世紀の日本儒学と明清考証学』（ぺりかん社、二〇二三年刊行、三三〇頁）

評者：黒田　秀教（福井大学、懐徳堂を中心とした日本近世思想史）

松川　雅信（神戸市外国語大学、日本思想史・日本近世史）

白石　將人（三重大学、『説文』を中心とした小学史）

著者：石　運（中国・重慶大学）

司会：尾崎　順一郎（立命館大学）

# 書評シンポジウム

## パネルⅠ　神谷まり子著『野蛮な文明――近代上海の通俗メディアと社会小説』（中国文庫、二〇二三年刊行、二七七頁）

本書は、清朝末期から中華民国初期にかけて上海で流行した近代通俗小説のジャンル、社会小説を論じたものである。

清末に社会改革を主眼として誕生した社会小説は、この時期に多く章回小説の形で新聞に連載された。無数の事件報道や巷のゴシップを繋ぎ合わせて過渡期の諸事象を諷刺し、男女をめぐる物語やユーモア、サスペンスなどフィクションとしての要素が加わった娯楽小説へと発展した。本書は社会小説の主要作品および関連作品の成立過程や内容を検討し、作家たちと小新聞、画報、映画、演劇など同時代の通俗メディアとの関係性にも注目しながら、「文明」の諸相として描かれたさまざまなテーマや人物像、都市イメージがどのように生産、再生産されていったのか、明らかにすることを目的としている。これらを通じ、これまで清末小説と五四新文学の狭間で見落とされてきた近代中国文学の一側面を検討した。

第Ⅰ部「メディアと作家」では、李涵秋『広陵潮』（一九一四）、孫玉声『海上繁華夢』シリーズ（一九〇三～）、朱瘦菊『歇浦潮』（一九二一）、包天笑『上海春秋』（一九二四）を取り上げた。この時期における原稿料制度の確立や出版業、都市空間の発展が文学の姿を根底から変え、また作家自身をも大きく変貌させながら小説世界を誕生させていったことを明らかにしている。

第Ⅱ部「女性像――ジェンダーとセクシャリティ」では、従来は花柳小説と見なされてきた張春帆『九尾亀』正続集（一九〇六～）や、社会小説と関係の強い黒幕ものの代表作、路濱生編『中国黒幕大観』（一九一八）、そして『新歇浦潮』（一九二五）などの作品を扱っている。これらにおいて批判的に描かれる妓女や女学生、「自由」「文明結婚」をめぐる表象を検討することによって、この時期の通俗メディ

アが生み出した女性像と時代の心性を探った。

パネリスト

評者：田中　雄大（文京大学、近代中国の詩的言語）

笠見　弥生（高崎経済大学、凌濛初「二拍」を中心とする短篇白話小説）

竹元　規人（福岡教育大学、中国近現代思想史・学術史）

著者：神谷まり子（日本大学）

司会：鈴木　将久（東京大学）

**パネルⅡ　石運著『十七・十八世紀の日本儒学と明清考証学』（ぺりかん社、二〇二三年刊行、三三〇頁）**

本書は、明清考証学との「共時的」な展開という視点より、近世日本儒学思想の形成過程及びその特質を論じるものである。

儒学、とりわけ朱子学に代表される「新儒学」は、十七世紀の近世国家の成立とともに当時の日本社会に新たな風を吹かせ、仏教思想が主導した中世とは異なる様相を呈した。近世日本の儒者は、思想・文化面のみならず、政治・外交・経済など諸方面にわたって影響力を及ぼし、近世社会に絶大な影響を与えた。

しかし、同時期の中国や朝鮮とは対照的に、近世日本では、儒者という身分は極めて不安定であり、彼らの多くは、儒者というアイデ

ンティティを有しながらも、武士や町人のような身分で社会生活を維持せざるを得なかった。また、明清交替に伴う東アジア思想世界の大きな変化の波は次第に近世日本に押し寄せ、新旧の学知が「波」の中で混ざり合い、「理学から考証学へ」という主題転換が近世日本でも起こった。このような近世日本において、儒学はどのように受容され、定着していったのか。その展開は近世日本社会にどのような影響を与えたのか。また東アジア思想史にとって、近世日本儒学の参与は如何なる意味を持つのか。以上種々の問題について、本書では、十七・十八世紀に活躍した代表的な儒者を主要対象として取り上げ、以下の二つ視角から、近世日本儒学と明清考証学の「共時的」な展開を明らかにする。①楊慎をはじめ、焦竑や毛奇齢など明清考証学者の著述及び学説が近世日本で流布・受容される過程を考察し、それを通じ、近世日本儒学と明清考証学のパラレルな展開を追う。②十七世紀末～十八世紀初に成立した古学をめぐる一連の論争を手掛かりにし、古学の登場から反／非古学の思潮の展開に至るまで、日本儒学思想史の文脈を再検討する。また、この背後に見られる近世日本の儒学知の形成及びその普遍化の過程を具現化する。

パネリスト

評者：黒田　秀教（福井大学、懐徳堂を中心とした日本近世思想史）

松川　雅信（神戸市外国語大学、日本思想史・日本近世史）

白石　將人（三重大学、『説文』を中心とした小学史）

著者：石　　運（中国・重慶大学）

司会：尾崎順一郎（立命館大学）

次世代シンポジウム

## 移動・親密関係・宗教的想像力——許地山作品における女性表象をめぐって

司　会：濱田　麻矢（神戸大学）
報告者：阿部　沙織（拓殖大学）
宋　新亜（関西学院大学）
林　麗婷（龍谷大学）

許地山（一八九三—一九四一）は台湾に生まれ、中国大陸・南洋・欧米を遍歴しつつ、創作や研究を通じて宗教・ジェンダー・文化の諸問題に取り組んだ越境的知識人である。本パネルでは、「商人婦」「春桃」「玉官」の三作品を中心に、近代中国における女性の越境経験と倫理の再編過程を考察する。報告者は作品の精読を通して、それぞれ移動経験、親密関係の再編、宗教的想像力という視点から、許地山が描いた女性像の革新性を読み解く。とりわけ、社会の周縁に置かれた女性たちが、越境的経験を通じて従来の価値観を問い直し、新たな生を模索するプロセスに注目し、近代中国文学における女性表象の可能性を再考する機会としたい。

### 新旧女性像の彼方へ？——「商人婦」再考

阿部　沙織（拓殖大学）

「商人婦」（一九二一）は、農村女性・惜官の波乱の半生を描く物語である。夫を追って厦門からシンガポールへ渡った惜官は、最終的にマドラスに売られるも、女性たちとの連帯によって苦境を脱し、現地で教師として自立する。本作は白居易「琵琶行」や『西青散記』の

才女像を想起させる一方、語り手の距離感や惜官の語り直しにより、伝統的「佳人薄命」像の再構築が試みられている。本発表では、国家・宗教・民族・言語を越える惜官の越境経験に着目し、五四期の〈新女性〉像や伝統的女性観と比較しつつ、現代的な視座から境界攪乱的な女性表象としての可能性を探る。

## 親密関係の再構築は如何にして可能か——「春桃」再考

宋　新亜（関西学院大学）

「春桃」（一九三四）は、戦乱によって故郷と夫を失った女性が、都市で自立しながら新たな関係性を築いていく過程を描く。春桃は北平で廃紙回収業に従事し、同居人の劉向高と疑似家族を形成するも、再婚には踏み切らない。その後、両脚を失った元夫を引き取り、三者での共生関係を築くに至る。本発表では、春桃の郷土的経験および農村から都市への移動経験に着目し、これらの経験が近代中国における親密関係、さらに核家族の再編成に対していかなる可能性を示唆するのかを検討する。

## 左手に聖書、右手に易経——「玉官」試論

林　麗婷（龍谷大学）

「玉官」（一九三九）は、宗教・女性・家族倫理をめぐる葛藤を描いた中編小説である。バイブル・ウーマンとして活動する玉官は、『易経』を携えるなど土着宗教との折衷的信仰を実践し、伝統と近代の交錯を体現する。本発表では、留学から帰国した息子夫婦との価値観のずれや、当初望んだ「貞節牌坊」を諦めて地域社会への奉仕を選ぶ過程に注目し、玉官の内面変化を読み解く。さらに、かつて惹かれた男性が親友の夫であったことを知り、自らの感情を抑えて再婚を断念し南洋へ旅立つという結末を、シスターフッドの実践として捉え、宗教的想像力と女性主体の交差として本作を再評価する。

## 発表要旨

### 1―1　儒家の「積善」と道家の「積徳」――文言伝における坤卦初六の解釋を中心に

莫　寒（北海道大学大学院）

坤卦初六の爻辭に曰はく、「初六。霜を履んで堅冰至る（初六。履霜堅冰至）」と。爻辭に對して、文言傳の解釋は特に人口に膾炙する。文言傳に曰はく、「善を積むの家には、必ず餘慶有り。不善を積むの家には、必ず餘殃有り」云々。（積善之家、必有餘慶。積不善之家、必有餘殃。臣弑其君、子弑其父、非一朝一夕之故。其所由來者漸矣。由辯之不早辯也。）中國の諺「善には善の報い有り、惡には惡の報有り（善有善報、惡有惡報）も同義である。そして、『老子』にも類似な語があり、七十九章に曰はく、「天道は親無く、常に善人に與す（天道無親、常與善人）」と。しかし、この「眞理」は客觀現實と矛盾している。司馬遷『史記』伯夷列傳では「伯夷叔齊餓死」「顏回蚤夭」の事例を擧げて、「善人惡報」の客觀史實を以って「善」「不善」と「福」「禍」との關聯性を疑い、「天道、是か非か（天道、是邪非邪）」という。

「積善」はやや儒家的な表現であるが、『老子』では「積德」という表現がそれに對應する。實は、「積〇」「積不〇」と「福」「禍」とを關聯させる表現は『淮南子』原道訓・馬王堆帛書『十六經』雌雄節・『韓非子』解老・喩老篇等の道家文獻に多く見られる。そこで、本研究では、「善」に對する解釋に着目して、文言傳の解釋を再檢討してみたい。本研究では、先行研究と出土資料を踏まえ、儒家の「善」と道家の「善」を辨別しながら、儒・道二家はそれぞれ「善」「不善」と「福」「禍」とをどのように關聯させているかについて明らかにしたい。併せてその關聯性の觀點から、文言傳の成立についても檢討してみたい。

## 1―2　敦煌写本『孝経鄭注義疏』(P.3274)の再検討

程　雪茹(東京大学大学院)

鄭玄の著作の中でも『孝経鄭注』は極めて特異な位置を占め、古くよりその真偽が問題視されてきた。南斉の陸澄がその「用辞」に基づいて疑義を呈し、唐代の劉知幾は「十二証」を挙げて偽書と断じたように、『孝経鄭注』が鄭玄の真作であるか否かは、後世の研究者が本書を論じる際に回避しえない根本的争点となってきた。清代中期には『治要』本『孝経鄭注』が日本から伝来され、さらに二十世紀三十年代に敦煌出土の『孝経鄭注義疏』(P.3274)が発見されたことにより、いわゆる「鄭注」の真偽とその注釈的特質をめぐる議論は再び活発化した。しかしながら、敦煌本『孝経鄭注義疏』そのものの書写形態や注釈方法の特質に着目した研究は依然として乏しく、従来の議論は主に内容整理や撰者比定の検討に留まっているのが現状である。

本論は、こうした先行研究の成果を踏まえつつ、敦煌写本『孝経鄭注義疏』(P.3274)の写本形態・注釈内容・解釈傾向を考察し、「義疏学」の視点から本写本が『孝経』研究史における位置付けを再検討することを目的とする。第一節では、写本の書写形式を整理し、巻末に見られる一字の空白の使用など、書写上の特徴を明らかにすることで、この写本が正式な著作物ではなく、学習用の筆記帳の性格を有する可能性を提示する。第二節では、形式から内容へと視点を移し、疏文における経文および鄭注に対する独特な解釈傾向を分析する。第三節では、最大の争点である著者問題に焦点を当て、従来提起されてきた四説――元行沖説、皇侃同門説、皇侃本人説、天宝年間以前説――をそれぞれ整理・検討する。第四節では、本写本における経文と鄭注の特徴に着目する。他の敦煌出土本と比較することで、今文『孝経』および鄭注の定着まで、内容と形式の変化を提示することで、「玄宗改経」説の再検討をし、敦煌本『孝経鄭注義疏』の位置づけを再定義することを試みる。

## 1―3　天籟説話に関する一考察――「隠（謎語）」としての側面から

楢崎　洋一郎（西南学院大学）

『荘子』斉物論篇冒頭の〈天籟説話〉は、古来多くの人々の興味を強く惹きつけてきたものであるが、その「難解」であることにおいても、史上屈指の作品と言えるかもしれない。ことに、最も肝心な問題であるはずの、「天籟」とはそもそも何か、という点になると、諸家の説は、よく言えば深遠玄妙、わるく言えば曖昧晦渋、いまだ納得しうる結論が得られていないのではないか、という印象を禁じえない。

本発表は、王叔岷・赤塚忠氏らによる、説話中の登場人物「顔成子游（諱は偃）」の諱・字が、孔子の門人である「言偃子游」と一致するという指摘から示唆を受け、この〈天籟説話〉自体を、一般的な意味での「寓言」というよりは、当時流行していた一種の謎掛け（「隠」）の要素を含むものとしてとらえ、あたかも説話作者の掛けた「謎」を解くような仕方で、「天籟」の正体を明らかにしようとするものである。その過程では、従来「本質に関わらない些末なこと」として顧みられることのなかった、この説話のさまざまな「不可解な点」についても、できる限り解明していきたい。また、これはやむを得ないところでもあったが、「天籟」「地籟」に比べると、ほとんど考察の必要すらないとされてきた「人籟（比竹）」が、実は重要な意味をもつことについても、思い切った再検討を試みたい。

これによって、「天籟」の正体が何であるかという問題について、従来の解釈・研究とは全く異なる、一つの明確な「解答」を、蛮勇をふるって提示したいと思う。

## 1―4　元弘相傳本『五行大義』における『白虎通』の利用――引用形式と異同の検討を通じて

路　勝楠（北海道大学）

本發表は、元弘相傳本『五行大義』（隋・蕭吉撰、日本に傳わる最古の完本）における『白虎通』の引用の實態を明らかにし、兩書の文獻學的關係を再檢討する試みである。檢討の對象は、本文および背記（紙背注）における『白虎通』の引用形式とその内容の異同に及ぶ。

特に注目すべきは、本文において『白虎通』の内容が出典を明示せずに複數箇所で引用されており、その多くが特定の卷・段落に集中している點である。これにより、『五行大義』編纂時における蕭吉の典據處理の方針について、またもう一つの視點を加えたい。

一方、背記では本文での引用と重複しない内容が記され、卷五に至っては本文に引用すらないにもかかわらず背記には『白虎通』の引用がある。これは、背記が『白虎通』を引用するのは、本文での引用とは直接關係なく獨立して參照するためであり、必要に應じて重要事項を確認しその事典的説明を利用したことを示唆する。

さらに、本文・背記いずれの引用においても、陳立整理の『白虎通』と内容が相違するところもあり、同書の校訂に對する一つの參考となり得る。

以上を通じて、蕭吉による『五行大義』の編集方針や元弘相傳本に加筆を施した注釋者の姿勢を明らかにするとともに、『白虎通』に對する内容の校勘にも寄與することを目指す。

## 1―5 『商君書』「去彊」、「說民」、「弱民」三篇の關係について

劉 如玉（北海道大学大学院）

『商君書』は先秦期より漢初期にかけて成立した法家思想の代表的書物で、商鞅變法の歴史、商鞅と商學派の思想、および法律史の研究において極めて重要な文獻とされている。

本發表は、特に「去彊」、「說民」、「弱民」の三篇（以下「三篇」という）に注目する。從來の研究に據れば、三篇はいずれも民衆の制御、國家の強化を論じており、且つ内容には、蒙季甫氏が指摘された「文多重出」の特徴がある。三篇の關聯性については、「說民」および「弱民」篇は「去彊」篇の注であるとする說と、「去彊」篇は「說民」および「弱民」篇から結論部分を抽出して成立したとの說も見られる。しかし、三篇をあらためて考察すると、その用語や思想構造には明確な差異が認められ、文章の順序配列にも再考を要する點が多く、從來の理解では十分に說明しきれない複雜さが見えてくる。

そこで本發表では、以下の三つの視點から三篇の關係を再檢討することを試みる。

まず、三篇の篇章順に注目する。「去彊」は第四篇、「說民」は第五篇と連續して配列されているが、「弱民」篇は第二十篇と離れており、この順序が『商君書』の編成過程と大いに關係している可能性が窺える。次に、用語面から考察すると、特に「故」字の頻度も、三篇間で顯著に異なっており、「故」の後ろに繼ぐ文の異同から三篇の論理展開を比較して分析できる。さらに思想面では、「物」の定義の相違などから三篇における思想的差異を檢討する。

以上の考察を通じて、『商君書』における篇の順序配列に見える編者の意圖を明らかにしたい。三篇は法家的文獻に對する研讀・摘錄の成果であり、單なる補說關係や抽出・被抽出の關係には還元できない可能性が示唆される。

## 1―6 『論衡』亂龍篇における「象類」について――『莊子』齊物論篇を手がかりに

凌　玲（北海道大学大学院）

『論衡』亂龍篇に「夫以象類有十五驗、以禮示意有四義。仲舒覽見深鴻、立事不妄、設土龍之象」とあるように、王充（一二七―九七？）は「象類」という表現を用いて屬性が類似する事象を十五例示し、四點の意義を擧げることで、土龍を用いて雨乞い儀禮を行うという董仲舒の説を辯護している。從來、この篇は『論衡』全體の主旨と乖離しているとされ、胡適らはこれを僞作と見なしてきた。しかし、黄暉らは『論衡』の思想の複雜性に注目し、愼重な再檢討の必要性を提起した。また、林麗雪は、「象類」という分類法が董仲舒の同類相動の思考と關係することを指摘している。

このように「象類」に言及する論者は、これを「類推」と同義に捉える傾向がある。これに對し、本發表では「象類」を、論理的な「類推」という機能に留まらず、比喩的・象徵的意味を持つ概念として再解釋することを試みる。實際、亂龍篇の末尾に見える「夫畫布爲熊麋之象、名布爲侯、禮貴意象、示義取名也。土龍亦夫熊麋布侯之類」という一文は、「熊麋布侯」のように「土龍」もまた禮を體現する象徵であることを明確に示している。また、『論衡』の他篇や先秦兩漢の文獻においても、「象類」は比喩的な文脈で用いられており、その語義には一貫して象徵性が含まれていたと考えられるからである。

このような象徵的認識は、『莊子』齊物論篇における「以指喩指之非指」、即ち概念の相對性、また、實物と抽象化された表現との關係を説く命題と通じるものがある。『論衡』と『莊子』はいずれも、萬物は概念という人爲的構造を通じて把握できるという認識に立脚しており、兩者の思想は象徵と概念の限界をめぐって深い關係が認められる。

本發表では『莊子』齊物論篇を參照しつつ、「象類」という表現が概念に基づく萬物理解の一形態であることを論證した上で、亂龍篇の比喩的構造と象徵的意義を明らかにしたい。

## 1―7 「入山」と「出家」――六朝道教修行者の家庭観念

呉　雨桐（東京大学大学院）

道教の修行者には「出家」と「在家」の区別があるが、出家戒律が明確に確立される以前の六朝前期においては、その区分ははっきりしていなかった。六朝末期までの仙人や道士の伝記を見れば、家を離れて山に入った修道者は、元の家庭と緊密なつながりを保っているケースが少なからず確認できる。修行者のなかには、家族と共に修行をしたり、道を得た後に家へ戻って兄弟や妻などを道へ導いたり、数十年後に故郷に帰って子孫に道を伝えたりする者もいた。また、個人の修行に励みながら、孝養や妻としての務めなど家庭内の責任も担っていた修行者も見受けられる。このようなやり方は、世俗道徳による拘束よりも、むしろ個人の積極的な選択によるものだと考えられる。

家族伝承は六朝道教の重要な伝授形式の一つである。六朝期には、丹陽の葛氏や句容の許氏のような代々修道を続ける名門家系が多く存在した。また、名門の間に婚姻関係を結ぶことによって、道の伝承を広げている。六朝道教も儒家に提唱された家族倫理の秩序を重んじ、孝悌を提唱していた。修行のために俗世と隔たる山に入ることが必要とされるが、家庭を完全に切り離すことは主張されなかった。六朝道教において、功徳や禍福が家族内である程度共有されることによって、家庭内における密接な結びつきを保っていた。道における先祖の功過に影響が与えられ、また個人の修行の成果も家族の内部で共有・伝承されることが求められた。

六朝道教の家族観には、当時の貴族社会における強い家族意識が反映されている。このように家族的な結びつきを重視する伝統があったことは、六朝期の上層社会において道教が安定的かつ持続的に広まり、発展できた大きな要因の一つであったと考えられるだろう。

## 1―8 「名号」と「称謂」から観る「道」――『老子』王弼注における用例を中心に

阿久津 光貴（大東文化大学大学院）

王弼の思想、特にその「無」「道」についての研究は、これまで盛んに行われてきた。日本においては、板野長八氏から始まり、金谷治、堀池信夫両氏に至るまで、それら研究には、ある共通の特徴が窺える。すなわち、抽象的な「無」「道」が、如何にして万物を存在せしめるかというような研究、言わば存在論的視点から検討されることが多かったということである。つまり、従来では、抽象的な「無」「道」の議論にウェイトが置かれる傾向があって、それよりももっと具体的な「有」が、その著作中でどのように述べられ考えられているのか、「有」という視点から王弼の思想を再検討するといった研究は殆んど為されてこなかった。

王弼は、「夫れ无は无を以て明らかにす可からず、必ず有に因る」、即ち「無」を明らかにするためには、必ずや「有」に因らねばならないといい、その「有」の具体例として、王弼は「言」（「言葉」）を挙げる。すなわち「言葉」を以て「無」は明らかになるのである。しからば王弼にとって「言葉」とは何か。発表者は既に、その著「老子指略」を中心に、王弼の「言葉」に対する考え方、用い方の概要を整理した。

本発表では、その「老子指略」中の内容を再確認したうえで、その目を『老子』注に移し、『老子』第二十五章中における「道」を中心に検討を進めていくことで、王弼の「言葉」に対する認識を更に掘り下げていきたい。

## 1―9　賈大隠『老子述義』の撰述目的について

吉岡　佑馬（都城高専）

本発表は賈大隠『老子述義』に見られる仏教思想の影響を手掛かりに、その撰述目的について検討するものである。

賈大隠は『儀礼』・『周礼』疏の撰者として名高い賈公彦の子息にあたる。彼のはっきりとした生没年は不詳であるが、儀鳳～垂拱（六七六～六八八）年間に官職に就いていることから、唐高宗から則天武后の治世に生きた人物であることがわかる。

その賈大隠の著作として目録に著録されているのが『老子述義』である。その書はすでに散佚しているが、本邦で撰述された複数の仏教・神道系写本および旧鈔本『老子道徳経』に引用されたことにより一部の佚文が今に伝わっている。現在はその輯佚稿（深野孝治「賈大隠『老子述義』について」）も提供されており、それらに基づく論考もいくつか発表されている。その中で次の二点がすでに指摘されている。

①河上公注を敷衍した義疏

②儒家思想による『老子』解釈

以上は『老子述義』の性格を理解する上で重要な特徴である。ただ、もう一点見落とされてきた要素がある。それは仏教思想の影響である。おそらく『老子述義』の佚文中に直接的な仏教用語が見られないため、これまで指摘されてこなかったと考えられる。しかし、『老子述義』には『老子』経文や道家のテクニカルタームによって輪廻とそこからの解脱を説明する修養論が見えている。ではなぜそのような方法で援用がなされたのか。その解明は『老子述義』の撰述目的を理解するうえで重要な手がかりとなろう。

そこで本発表では、はじめに『老子述義』の修養論に見られる仏教思想の影響を検討する。その上で、上記の援用方法は唐高宗期より則天武后期に至る学術的背景に起因する可能性を指摘する。そして、以上を踏まえ『老子述義』の撰述目的について仮説を提示したい。

## 1—12　李当之の本草著作に関する一考察

竹宮　英朗（東京大学大学院）

李当之は、その名は史伝に見えず、その生涯も具に知ることは叶わない。『隋書』経籍志には、『神農本草』八巻の注に「李譜之『本草経』一巻」とあり、また『桐君薬録』三巻の注に「李譜之『薬録』六巻」とある。そして、『旧唐書』経籍志と『新唐書』芸文志には『李氏本草』三巻」が録されている。

これら書名も巻数も異なるため、それぞれ別々の著作なのか、同一なのかは定かでない。尚志鈞氏は「対『李当之薬録』的考察和評価」において、李当之には『薬録』と『本草』、二種類の著作があるとし、対して、馬継興氏は『中医文献学』において、『李当之薬録』には『李当之本草経』、『李氏本草』などの別名があるとしている。

李当之について、陶弘景は『本草経集注』序録において、「魏晋以来、呉普、李当之等、更に復た損益す。」と述べており、『新唐書』高張伝では、「別録は、魏晋以来呉普、李当之の記す所、（中略）故に弘景合はせて之を録す。」と記している。また、張杲の『医説』では、「李当之は、（中略）華佗の弟子。少くして医経に通じ、尤も薬術に精なり。（出梁『七録』）」とする。

従って、李当之は魏晋の人物であり、本草についての著作があったことがわかる。また、華佗の弟子であった可能性もある。

李当之の本草著作は、『本草経集注』、『新修本草』等の本草関連の医書をはじめ、『芸文類聚』、『太平御覧』等の類書にも引用されている。引用する際には、『李当之薬録』、『李当之本草』、『李氏本草』の書名で引用する場合も、「李当之」、「李氏」、「李云」などの形式で引用する場合もある。

李当之に関する先行研究は、上記尚氏、馬氏のものの他、厳世芸等編『三国両晋南北朝医学総集』に李当之の著作を輯佚したものがある。本発表では、先行研究を参考にしつつ、李当之の本草著作の構成を分析し、「呉普本草」と『本草経集注』との比較を通して、それが後世に与えた影響について考察を行う。

## 1―13　黄老思想から『太平經』への展開

徐　正丁（北海道大学大学院）

黄老とは、道家を基盤としつつも、無爲・清靜を核心理念とする政治思想として戰國末におこり、前漢初期に流行した思想流派である。一方、「黄老」という語は『史記』『漢書』『東觀漢記』において徐々に養生や信仰の代名詞へと意味變化を遂げている。また、後漢末期には神仙信仰や養生術が教義化・制度化され、早期の道教として獨自の宗教體系が築かれていった。特に、後漢期に成立した『太平經』には黄老思想の影響が色濃く反映されており、こうした過程を通じて、道教の成立には黄老思想によって蒔かれた種子が徐々に萠芽・成長していったことを窺える。

まず、黄老思想はその包攝性ゆえに、道教形成における理論的・實踐的枠組みを提供した。一九七三年湖南省の馬王堆三號墓より發掘された『經法』君正篇には諸家の思想が融合され、早期道教における多元的思想融合の雛形となった可能性がある。後漢末には『太平經』を基盤とする太平道や黄巾の亂にもこのような枠組みが用いられた可能性があり、再檢討の餘地が殘されている。また、前漢初期に黄老思想が盛行した背景の一つには、劉邦・呂后時期の大臣たちによる消極的な政治姿勢と個人的延命・政治的な保身の意識があったと考えられる。さらに、皇帝の長生不死追求と結びつき、後漢期には「黄老」が個人修行・養生の代名詞へと變容した。こうした思想は最終的に後漢末期の『太平經』にも反映されており、政治的な考えから兩者の關係についても再檢討を試みたい。

本發表では、①『經法』君正篇における諸子百家思想の融合と『太平經』との關係、②黄老思想の養生觀から『太平經』における養生術の萠芽への展開、という二つの視點から黄老思想と『太平經』の關係を檢討し、その展開の過程についても考察を試みる。

## 1―15　徐孚遠『釣璜堂存稿』に見る南明の日本乞師と舟山支配

劉　明鍇（九州大学大学院）

本発表は、徐孚遠の詩集『釣璜堂存稿』を中心に、一六四七年に発生した安昌王の日本乞師事件と、南明政権の舟山支配について考察するものである。

これまで南明政権による日本乞師については、主に周崔芝・鄭芝龍・馮京第・阮美らの使節団に焦点が当てられてきたが、明宗室安昌王の来日については注目されることが少なく、詳細な経過は明らかにされていなかった。また安昌王の帰国地点、周崔芝・馮京第・阮美乞師の出発地である舟山は、東アジア海域に影響を及ぼしているが、史料的限界により、南明の舟山支配の実態と秩序変遷は必ずしも明確ではない。それに対し、徐孚遠の詩集『釣璜堂存稿』にはそれらに関する直接な記録が残されており、高い史料的価値を有しているが、一九二六年に上海懐旧楼刻本が刊行されて以来、十分に活用されていなかった。

南明隆武政権の崩壊後、徐は魯王政権に協力していた。この時期、安昌王は魯王監国の命により日本乞師を準備していた。徐は安昌王使節団の出発地である福建海口に滞在して使節団の出発と帰国などを記録しており、当事者に近い立場から貴重な一次資料を提供している。これを関連史料と照合することで、安昌王の来日と対日交渉の過程が明らかにできる。また安昌王一行は舟山より帰国し、徐孚遠もこの時舟山へ赴いた。徐孚遠は当地の実質的支配者である黄斌卿のもとで、舟山の文教復興と秩序の回復を目の当たりにした。しかし、一六四九年末の政変で黄斌卿は魯王政権の武将に殺害され、舟山は魯王政権によって支配されることになった。後に魯王政権武将の専横により、政争が繰り返され、舟山の南明勢力は弱体化し、一六五一年に清軍に陥落されたのである。

徐孚遠の詩は、こうした南明政権の日本乞師や舟山統治の変遷を切実に描写し、明清交替期の錯綜した様相を伝える貴重な歴史資料であり、南明史の研究に新たな視座を提供する。本発表はその一端を示すものである。

## 1―16　中国古代文献における再発新星

夏　雨（北九州市立大学）、李　雨珊（中国・太原理工大学）

中国の古代文献には、「客星」と呼ばれる天文記録が存在する。客星とは、空に突然現れる星を指し、その最初の記述は『漢書』に見られる。現代天文学の観点から見ると、古代文献に記された客星には、新星、超新星、彗星などが含まれる。客星に関する研究は、日本、中国、韓国、欧米においてすでに多くの議論が行われてきた。特に、宋代の至和元年（一〇五四年）五月から嘉祐元年（一〇五六年）三月にかけて出現した「天関客星」は、中国の『宋史』、『宋会要』、『続資治通鑑長編』、および日本の藤原定家の『明月記』にも記録されている。現代天文学の研究により、この天体は「SN1054」と命名され、その爆発の残骸は「かに星雲（Crab Nebula）」として知られ、超新星爆発に関連する天体として最初に確認された事例である。

数多く記録された客星の中には、再発新星だと考えられるものも存在する。再発新星とは、一度爆発した後、数年から数十年の間隔を経て、二度、三度、ないしはそれ以上の爆発を繰り返す新星のことである。現代天文学による観測は二十世紀に始まったため、東アジアにおける古代の客星記録は、再発新星を探索するうえで極めて重要な資料となる。

本発表では、南斗領域に出現した四つの客星に着目する。これには『漢書』に記された前漢・初元元年（紀元前四八年）の客星、『文献通考』に記された唐・開成二年（八三七年）の客星、『宋史』および『文献通考』に記された宋・大中祥符四年（一〇一一年）の客星、さらに『明会要』に記された永楽十三年（一四一五年）の客星が含まれる。古代文献と現代の天文観測データを組み合わせ、より多くの歴史的記録を収集するとともに、候補天体のマルチバンド観測記録を分析し、再発新星の存在とその性質を検討するものである。

## 2―1　陳祥道『論語全解』考――王安石学派の『論語』解釈

井澤　耕一（茨城大学）

今回、本大会で発表するのは、北宋の王安石（一〇二一―八六）の門人と目される陳祥道（一〇四一または四二―一〇九三）の事績とその著『論語全解』に見える解釈の特徴についてである。

『宋史』および『宋元学案』荊公新学略、その他の史料に拠れば、陳祥道、字用之は、福州閩清の人。弟には、音楽の百科全書というべき『楽書』二百巻を撰した陳暘（一〇六四―一一二八）、字晋之がいる。陳祥道は、治平四年（一〇六七）進士に及第したが、その同榜の進士として王安石の長子である雱（一〇四四―七六）、字元沢がいた。その後父の罪に連座して一時不遇をかこつが、元佑四年（一〇八九）には太常博士、六年（一〇九一）には秘書省正字、そして七年（一〇九二）には館閣校勘に任命され、緋銀魚袋を賜った八年（一〇九三）に卒した。著作として、現存している『礼書』百五十巻、『論語全解』十巻があるほか、『宋史』芸文志には『注解儀礼』三十二巻、『礼例詳解』十巻が著録されている。

発表者は昨年度の大会において、王安石の『詩』解釈を古注、新注と比較して考察したが、今回の発表では、陳氏の『論語全解』の釈文を古注・新注と比較する。さらに『論語全解』中で援引されている『易』『詩』、三礼、春秋三伝などの経書および『孟子』『荀子』『老子』『荘子』の諸説を詳細に分析し、そこから陳祥道の『論語』解釈の真意を明らかにする。加えて、すでに散佚した王安石『論語解』十巻、王雱『論語口義』十巻の流れを汲んだ（『宋元学案』全祖望の言）『論語全解』と文集その他に見える王氏自身の『論語』解釈を比較して、王安石学派内における『論語』解釈の継承および各人の独自性を明らかにしていく。

## 2―2 「事皆有益」の行方――『論語集注』子張篇第六章の検討

末木　恭彦（独立研究者）

本研究は『論語集注』子張篇第六章の検討である。

『論語集注』は初稿から幾多の變遷を經て現在流布している刊本に到っている。朱熹は繰り返しその稿本に手を加えている。稿本の斷片は現在も殘り、朱熹が原稿に朱を加えていることがわかる。現行本に到る以前の『集注』は他にも『朱子文集』等の文獻に見える者もある。子張篇第六章は『論語集注大全』に初期の形が記錄されている。この初期段階はどうしてそういう形になっているか、その理由が分かる。『論語或問』に理由は記されている。

子張六の場合、「心不外馳而事皆有益」という表現が初期段階では重要であった。然し現行本では後半の「事皆有益」という表現は消えている。それでは朱熹はこの部分を捨てたのであろうか。重要部分の變更であろうか。然し單純にはそうと言えない。此處に朱熹の思考の跡が窺える。

此處に見える朱熹の思考が朱熹一般に認められることとは言えないかも知れない。然し朱熹の思考の深部が見えているのかも知れない。今後の朱熹研究、或いは『論語集注』理解に新たな可能性を拓くのではないかと考える。

## 2―3　胡瑗教育活動の思想史的展開――「明体適用」の発言者・劉彝を例として

大森　幹太（二松学舎大学大学院）

本発表は、胡瑗の学問及び教育の成果が、同時代以降の士大夫思潮にどのように波及したのかについて、彼の高弟である劉彝を取り上げて考察するものである。

注疏の学に対し斬新な経書解釈を教授する経義斎を体、士大夫として必要な実務能力を講義する治事斎を用とみなし、胡瑗の学問及び教育理念を表現した「明体適用」については、従来様々な側面から研究がなされてきた。

かつて楠本正継氏は、程頤の「体用一源」や朱熹の「全体大用」につながる宋学の前駆として、胡瑗の「明体適用」を位置付けた。佐藤仁氏は、胡瑗の教育の立場が、制挙の「才識兼茂明於体用科」を想定する指導法であったことを論証した。

それでは、「明体適用」と資料上表明されるこの標語は、具体的にいかなる思考構造によって成り立ち得たのであろうか。この問題を究明する手掛かりとして、湖州州学において胡瑗の門生であった劉彝という人物に着目したい。

劉彝（生没年不詳。慶暦六年の進士。）は、神宗期の熙寧二年、召対の際に胡瑗の学問及び教育の特色を「明体適用」と言い表したまさにその人である。つまり、今日我々が胡瑗を特徴付けて用いる「明体適用」の語は、この劉彝の発言に由来している。また、劉彝は治水事業に優れた士大夫として伝わっており、かつ『七経中義』一七〇巻や『洪範解』六巻といった経書解釈に関する著作もあったという。その意味においても、「明体適用」の理念を最もよく体現した胡瑗の門人と言えよう。

そこで本発表では、『尚書全解』『礼記集説』など諸書から収集した、劉彝による経書解釈の断片を題材とし、劉彝が「明体適用」の言葉を発した根柢にいかなる思考が具わっていたかについて検討する。そして、胡瑗の学問において「明体適用」の思考がどのように窺えるかについて、改めて考察を加える。これにより、胡瑗と劉彝における思考の共有性を明らかにした上で、道学形成史を探る新たな視角を提示したい。

## 2―4　錢大昕の「史学」と『三国志』

佐藤　大朗（早稲田大学大学院）

清朝考証学（考拠学）が盛んであった乾隆・嘉慶時代、錢大昕は『廿二史考異』を著し、歴代正史に対する見解を示した。濱口富士雄「錢大昕の考拠学としての「史学」について」（『東洋史研究』四八巻三号、一九八九年）は、朱一新・梁啓超・杜維運ら清末以来の中国における錢大昕の評価に修正を加えた。濱口氏によると、錢大昕の史学は、儒教的意義づけのもとに運用されたものである。音韻・訓詁・文字学など、方法論には客観性があるが、近代科学の実証史学とは異なる。錢大昕の史学と経学の関係は、胡藤「錢大昕の「経史不二」説における歴史観と学問観――章学誠との比較を兼ねて」（『北東アジア研究』三三号、二〇二一年）でも論じられている。

錢大昕の「史学」とはいかなる学問で、経学とどのような関係にあるのか。この問題について、本報告では、錢大昕の『三国志』に対する説に着目し、具体的な個々の考証に即して彼の「史学」を検討したい。

『三国志』を編纂した陳寿は、同時代人（旧蜀臣、晋臣）であり、『晋書』陳寿伝より以来、当事者にまつわる曲筆（事実の歪曲）が疑われてきた。また、『三国志』には、本文とほぼ同じ字数で異聞等を補った裴松之注があり、多面的な記録の検証が可能である。このような史料的性格を持つ『三国志』を対象とした「史学」は、考証学と実証史学との異同を明らかにする材料として適していよう。さらに錢大昕は、『諸史拾遺』巻一で、『三国志』に対する「何屹瞻」（清朝前期の校勘・考証学者、『義門読書記』を著した何焯）と、「陳氏景雲」（何焯の弟子、陳景雲）の説を逐一引用して賛否を示し、自説を構築している。考証学は箚記（読書記録）という形態で展開されるため、学説の批判・継承の関係が分かりにくい。錢大昕自身の筆で、先行者の説との異同を多く書き残しているという点でも、『三国志』に対する錢大昕の考証は、彼の「史学」の分析に有用であると考える。

## 2―5　元末明初の江西地域における儒生の科挙出題文適応の考察について

胡　華喩（東京大学大学院）

本報告では、十四世紀における江西地域の儒生が科挙出題形態としての「合題」にどのように対応したかに焦点を当て、受験者側の出題文への適応実態とそれに伴う知的動向の変遷を考察する。

これまでの明清科挙研究では、科挙制度の連続する過程が描かれてきたが、その中で「合題」は特に受験者の「専経」能力を測定するために第一場での「経義」試験において出題されるとされている。この出題形式は、異なる背景を持つ経典の内容を一つの質問に統合し、受験者の読解力と解釈力を試すものであった。しかし、元末から明初にかけて、儒生は政治体制の移行に伴い、新旧科挙出題形態への適応の課題にも直面した。元の儒生は、朱子学に基づいて自己の学問を示す一方で、モンゴル政権が儒教思想を通じて追求する政治のあり方を理解することに努めた。明に入ると、儒生は主考官の意図を慎重に読み取り、朱子学の解釈を柔軟に調整しながら、出題文に対して求められる答案に整える必要があった。そこで明初において「合題」が、経典の解釈能力に加え、当代の問題をより深く理解するための第三場の「策」にも採用されていた事例が明らかになった。

本報告では、新旧の科挙出題形態への受験生の適応を問題提起とし、十四世紀江西地域の儒生の反応や思想の変容を探究する。本報告は洪武二十一年（一三八八）の進士、解縉（一三六八～一四一五）の「制策五道」を中心に考察する。比較考察の指標として、元代の『新刊類編歴挙三場文選』や、明初文集資料における洪武四年（一三七一）の進士、呉伯宗（一三三四～一三八四）の『栄進集』の扱いに注目する。「策」の目的を同時に考慮することで、「合題」現象の意義を探ることができ、中央政府の意向が示唆する複雑な情勢における朱子学の変容を考察する可能性を持っている。

さらに、本報告では元末の知識の土壌に育まれた、複数の世代にわたる元末明初江西の儒生たちを幅広く取り上げる。先行研究の成果を踏まえ、明初における科挙制度と朱子学の解釈がいかに共に進化していったかを理解する手助けとなることを目指す。

## 2―6 「聖諭六言」解釈に見る羅近渓の思想と実践

潘　虹智（東北大学大学院）

いわゆる泰州学派の代表的人物とされる羅汝芳（号近渓、一五一五―一五八八）は、孝悌慈という万人に共通する原初的な感情を通じて、人間の内面にある生生たる天性＝良知を覚醒させるのみならず、個人から家国天下へと広がる万物一体の実践を構想した。郷約を定め、「聖諭六言」を解釈し宣講するのは、かかる構想の民衆教化における実践であると目される。

近渓の教化思想と六諭解釈について、酒井忠夫は民衆に良知を伝える語りの形式として、『寧国府郷約訓語』が六諭を白話形式で説いたことに注目し、荒木見悟は孝悌慈＝赤子の心から「万物一体」への倫理的展開を志向した近渓の構想を見た。両氏も言及した『太祖聖諭演訓』における因果応報的語りに特に注目した呉震は、加えて六諭解釈における『大明律』導入も指摘し、それらを近渓思想の哲学的性格にまで踏み込んで論じて、明代中期以降における良知学の政治化・宗教化の傾向の一環として位置づけている。

本発表は先行の諸研究を受けつつ、郷約と語録とに示された六諭解釈の総合的理解を目標とする。すなわち、近渓は郷約では庶民向けに教化的な語りを、会語では知識人向けに義理的論述を用いているが、これは相手に応じて形式のみならず内容も使い分けていたのか、それとも一貫した理念の異なった表現であるのか、こうした点が未解明であると思われるのである。また、『太祖聖諭演訓』は後に何士晋によって加筆されたことが序文に見られ、どの語句が近渓自身のものかを見極める必要がある。

そこで本発表では、まず『太祖聖諭演訓』について近渓自身に帰すべき語句を特定する。次に、それらの語句と、『寧国府郷約訓語』・文集や語録に散見する六諭関連の発言とを併せて考察対象とし、彼が六諭解釈を通じていかに万物一体の理念を具体化しようとしたかを明らかにしたい。

## 2―7　王陽明における「見在」の人間像――感情と身体についての議論を手掛かりに

志村　敦弘（東洋大学）

明を代表する思想家、王陽明（一四七二～一五二九）の所説のなかで最も広く議論を呼んだものの一つは、おそらく「無善無悪」説であろう。その基本的意義としては、「……性善説が単純明快な論理で自らの基礎づけを計ろうとすればする程、人間の存在実相から遊離していく恐れがあるのである。これを避けるためには、一旦善と定めたものをそのまま固執しつづけないで、事態の変化に対応する善意識の再構成が要求されるであろう。」（荒木見悟『陽明学の位相』研文出版　一九九二年、一七四頁）ということに尽きるであろう。それは千変万化する現実世界との関係を見据えた言説といえる。

さて、この「無善無悪」説についてさらに考えを進めるならば、そこには「人間の存在実相」、つまり生々しい現実やそこに生きる生身の人間たちの姿が浮かび上がってくるはずである。実際、陽明は心・良知をはたらかせる場としての「見在」（今ここの現実）や、喜怒哀楽や好悪の感情、身体（器官）の働きなどについて言及することが多い。しかしこの点については、先行研究においても十分には論じられて来なかったように思われる。

では、その現実世界に生きる人間について、彼は具体的にはどのように認識していたのであろうか。本発表では、陽明の感情や身体についての議論や当時の時代状況などを手掛かりとしつつ、その人間像の一端を明らかにしたい。

## 2―8　蘇軾・蘇轍の窮理、尽性、至命の説――王安石の説との比較から

田村　有見恵（東京都公立学校）

本発表では北宋五子を中心とする朱子学の視点とは異なる、王安石の学説（以下、新学）を軸とした角度からの北宋思想史の再検討を目的とし、二蘇の窮理、尽性、至命の説を注疏や王安石の説との差異点を中心に考察する。

従来、先行研究では新学に窮理、尽性、至命の説や性命之理の説があったこと、それらの説に対する批判から宋学が興ったことは指摘されている。しかし、王安石の説を同時代人がなぜ、どのように批判したのかについては不明な点が多い。その王安石の核心的な学説である『易』を典拠とする窮理、尽性、至命の説には、『易』の注疏には見えない三点の特徴がある。窮理を知と関係させて論じる点、尽性を仁・誠と関係させて論じる点、窮理、尽性して命に至るというように順序を設ける点である。この王安石の説の特徴は王雱・曾鞏・陸佃・陳祥道・龔原等に共有されている。また、程顥・程頤・蘇軾・蘇轍・張載・邵雍等も窮理、尽性、至命を論じているが、各人の説については研究の余地が多分に残されている。

二蘇と王安石の説の共通点としては窮理を知と関係させて論じる点や窮理、尽性、至命に順序を設けた点が挙げられる。一方で差異点としては、王安石が命を「人受天而生使我有是之謂命、命之在我之謂性。」（『礼記発明』「中庸」）というように本体（仏教における仏性、老子思想における道）の意味で解釈したのに対し、二蘇は命を「堯舜不能加焉、桀紂不能亡焉。是豈非性也哉。……性之至者亦曰命。」（『易伝』乾）というように、性の概念に比重をおいて解釈した。これは何を意味するのか。

二蘇の窮理、尽性、至命の説を王安石の説との比較を中心に分析することにより、王安石の窮理、尽性、至命の説の共有と、それをめぐる議論の角度から宋学の興りを検証したい。

## 2―9　中国における進化論受容――丘浅次郎の受容を例に

松原　えみ（東京大学大学院）

丘浅次郎（一八六八―一九四四）は明治から昭和にかけて東京高等師範学校で教鞭を執りつつ、進化論に関する多数の著作を著した生物学者である。彼の代表作である『進化論講話』（一九〇四）は進化論を平易に解説し、当時のベストセラーとなった。また、進化論を元に社会を批評した「人間下り坂説」（一九一〇）では、人間すら進化の最高点に達したのちは衰退し、滅亡する存在として位置づけた。この「人間下り坂説」は、彼を単なる自然科学者のみならず、社会思想家として位置づけるものである。

丘の著作は日本国内にとどまらず、中国語にも翻訳されて広く読まれた。坂本ひろ子氏は李大釗が優生学を積極的に推進する根拠を丘の著作に見出していたことを、李冬木氏は魯迅が丘の著作を通じて進化論を理解していたことをそれぞれ明らかにしている。しかし、これらの研究は個別知識人の受容に限定されたものであり、中国全体における翻訳・出版・読解の過程を包括的に検討した研究は依然として乏しいのが現状である。

本発表では、丘の著作が中国でいかに翻訳され、どのような社会的関心のもとに受容されたかを明らかにする。翻訳者としては、彼の教え子で、中国や台湾で生物学者として活躍した薛德焴や馬廷英、日本留学中に感銘を受けた劉文典、商業的価値に着目した張我軍らをあげることができ、彼らの翻訳は商務印書館（上海）などの大手出版社からも刊行された。

中国における丘の思想を受容において注目すべきは、日本ではあまりにも悲観的であるとして批判を浴びた「人間下り坂説」が、中国ではむしろ「中国人という民族の滅亡」という差し迫った脅威と結びついて、深刻に受け止められていた点である。

以上を通じて、本発表は日中間における近代学術や思想交流の一端を照らし出すとともに、民国期中国における科学的知の受容と社会的危機意識との関係性を再考する視座を提供する。

## 3―1　島津久光の楽府詩について

中西　望月（九州大学大学院）

島津久光（一八一七―一八八七）は、異母兄である薩摩藩第十一代藩主・島津斉彬（一八〇九―一八五八）の急逝後、薩摩の「国父」として中央政界に進出し、幕政改革の一翼を担った。一方で久光は好学の士であり、儒学・漢詩・和歌・書道を学び、なかでも漢詩に秀でていたという。彼の蒐集した図書が根幹をなす玉里文庫（鹿児島大学附属図書館所蔵）には、『唐詩選』『唐詩品彙』などの唐詩選集をはじめ、多くの漢籍が所蔵される。また、同文庫には久光自編の漢詩集として『霧島温泉詩稿』（天保十年［一八三九］）、『孰賢詩稿抜萃』（天保十三年［一八四二］）、『詩稿』（弘化元年［一八四四］）の三種が所蔵されており、いずれも薩摩藩造士館教授・山田有裕（一七八五―一八七三）の評点が施されている。とりわけ『詩稿』は、久光の漢詩のみを二十五首収録しており、そのうちの十五首が楽府詩である。

本発表では十五首の楽府詩に着目して考察する。まず、久光の楽府詩に附された山田有裕の評語とそれに対する久光の書き入れを手がかりとして、久光が新井白石『白石詩草』を参照していたことを指摘したい。さらに、久光の詩句の典故を調査したところ、白石と同じく木下順庵の門下である祇園南海『一夜百首』に収録される同題の作品を多く踏まえていることに気付いた。以上から、久光が如何にして楽府詩を創作したのか、その具体的様相を明らかにしたい。

## 3―2　近世琉球における久米村士族の儒教的祖先祭祀の実態とその変遷
### ――諸家の位牌祭祀と拝礼作法を中心に

劉　書鈺（関西大学）

近世琉球では、一六〇九年の薩摩侵攻による混乱からの復興と国家的自律の維持を目指し、王府によって儒教的合理主義に基づく諸改革が推進された。特に摂政・羽地朝秀（一六一七～一六七六）は「節用愛人」の理念のもとで改革を断行し、『寛永諸家系図伝』（一六四三）の影響を受けて国王の家系図『中山世鑑』（一六五〇）を編纂した。これに伴い一六七〇年には士族に系図提出が命じられ、一六八九年には系図座が設置されて士族と百姓を峻別する身分制が整備された。

一七二五年、三司官・蔡温（一六八二～一七六二）は羽地の「不浄定」を儒教の五服制に基づいて再編し、琉球独自の服制を定めた。一七三七年の改訂を経て宗族制度が整うと、士族層は家族内の尊卑秩序を維持するため、儒教儀礼に依拠するようになった。南宋・朱熹（一一三〇～一二〇〇）の『家礼』は尚敬王期（一七一三～一七五一）、蔡温の『要務彙編』（一七一五）において元服の参考書として推奨され、儒教儀礼が士族社会に浸透する契機となった。

蔡温の一族・蔡文溥（一六七一～一七四五）は明・丘濬（一四二一～一四九五）の『文公家礼儀節』を参照し、自家用の礼式書『四本堂家礼』を作成した。同書はのちに琉球儒式祭祀の代表例として沖縄民俗学の注目を集め、祖先祭祀研究の基礎資料とされた。ただし従来の研究には、第一に祖先祭祀の背後にある儒教思想の分析が不十分であること、第二に蔡温思想の影響により祭祀受容が一様でなかった実態が見落とされがちな点という、二つの課題がある。

実際、一九世紀成立の久米村鄭氏『嘉徳堂規模帳』には『四本堂家礼』とは異なる祭祀儀礼が記録され、また同村の陳氏・梁氏・王氏・金氏の祭祀資料にも、家ごとの儀式作法の特色が確認できる。本発表では、これら久米村の祭祀文書の成立年代に即し、各家における位牌祭祀や拝礼作法の変化を中心に、儒教祭祀受容の多様な様相とその思想的変遷について論じたい。

## 3―3　本朝近世に於ける王覇観

荒川　兼汰（名古屋大学大学院）

儒教の伝統的な解釈に於いて、「王道」とは、王自らの「徳を以て仁を行う」政治のことを指し、理想の政治形態とされる。一方「覇道」は、王を凌ぐ権力者による「力を以て仁を仮る」政治を指し、忌むべき政治形態とされている。

ところで、江戸時代を通して幕府は儒学を奨励し、各藩は競って儒学者を登用して藩政に参加させた。たとえば新井白石や熊澤蕃山など著名な儒学者らが幕政・藩政に参加して手腕を発揮している。しかし、朝廷を差し置いて江戸幕府が天下を治めるという政治形態は、儒学的に見れば「覇道」であり忌むべきものである。儒学者の立場から見ればここに矛盾が生じているのであり、このような儒教的理想と現実の徳川幕府の治世との不一致を、当時の儒学者は如何に捉え、如何に折り合いを付けようとしたのか、学派ごとに邦儒の「王覇観」を検討する。

従来の「王覇観」は、「王道」と「覇道」とは本来的に「異質」なものであるとされて来た。先述の通り「徳を以て仁を行う」ことを「王道」、「力を以て仁を仮る」ことを「覇道」としており、質的に両者は別たれると見做されている。またこれは新注（朱子）古注（趙岐）ともに同じである。邦儒もまたこの「王覇観」を踏襲して、たとえば林羅山ら朱子学派、伊藤仁斎ら古義学派は「王道」と「覇道」とは「異質」であると辨別している。一方、荻生徂徠ら古文辞学派と中井履軒とは、「王道」「覇道」をどちらも「同一直線上」にある「道」、すなわち「同質」であると論じている。徂徠は「王道」「覇道」を「時勢と地位による差」とし、太宰春台は「大成したか否かによる差」とし、履軒は「徳の量による差」とするが、本質的には「王道」も「覇道」も「同質」な一つの道であると主張する。履軒は別としても、ここに学派間による解釈の相違が見られる。また後世の反徂徠派は、古文辞学派の「王覇観」に批判の矛先を向けていることも注目すべきであろう。

## 3―4　平山行蔵の復讐論――江戸後期における九世復讐説の展開

廖　嘉祈（東京大学大学院満期退学）

平山行蔵（一七六〇～一八二九）は、江戸四谷の伊賀組同心の家に生まれ、ほぼ生涯にわたり在野で兵学を教えていた、江戸後期の御家人である。彼には、毎晩甲冑を着て就寝するなど、泰平を謳歌する同時代人の風潮に逆行する強烈な言動が多く見られる。そのため、戦前においては、対外危機に備えた「先覚者」として評価されるのが通例であった。これに対し、戦後には知名度が低下し、奇矯な武人として言及される程度にとどまっている。

そこで本発表では、平山の文集の自筆稿本などを分析することにより、復讐に対する関心がその思想において枢要な位置を占めていたことを明らかにする。

平山の復讐論は、まずその主張の鮮烈さにおいて際立っている。彼は、成敗を度外視した峻烈な即時復讐を理想とする一方で、『公羊伝』に見られる九世復讐説のような、長期間を要する復讐についても強く肯定していた。経書解釈の世界では、九世復讐説の妥当性に対して多くの批判が寄せられていたが、平山はこれを同姓不婚や恥辱感と結びつけることで、その正当性を論証しようとした。その結果、「国仇」と「私仇」の区別にかかわる身分上の差異は重視されず、独自の復讐論が成立するに至っている。

さらに平山は、九世復讐説を単に経書解釈として妥当であると論証しただけでなく、赤穂事件や文化日露紛争に関する論評においても、実際にこれを活用しようとしていた。復讐の対象を加害者本人ではない他の人物に移すことは可能か、また、血縁関係のない人物のための復讐に対して、いかに経書上の根拠を与えればよいのか――本発表では、平山がいかに九世復讐説を最大限に活用しながら、これらの課題に応答していたのかを明らかにする。あわせて、復讐によって「国恥」を雪ごうとするその主張が、十九世紀の日本思想史においていかなる位置を占めているのかについても論及したい。

## 3―5　義堂周信の文学観について――『東山外集抄』を中心に

太田　亨（広島大学）

義堂周信（一三二五～一三八八）は、絶海中津（一三三六～一四〇五）とともに日本中世禅林を代表する禅僧である。その著作には、詩文集『空華集』・日記『空華日用工夫略集』・偈頌の選集『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』・抄物『東山外集抄』等が存する。

義堂の文学観については、『空華集』に所収される和韻詩の多さから、禅林文学の退廃を招いたものとして非難されることが多い。一方で、玉村竹二氏や蔭木英雄氏は、義堂が仲霊契嵩の作品を重んじ、偈頌中心の禅文学を目指していたとし、その文学観を高く評価している。これまでの研究は、義堂の作品の成立事情を日記『空華日用工夫略集』に求め、そこから文学観を導き出している傾向にある。

発表者は、義堂の文学観を追究するに当たって、抄物『東山外集抄』に注目する。『東山外集抄』は、義堂が雪峰慧空（一〇九六～一一五八）の作品に対して抄（注釈）した書物である。義堂が『東山外集』に詳しかったことは、日記に『東山外集』を講義した記事が見られることからも窺える。『東山外集抄』には、義堂の文学観が如実に表れているといえよう。

以上のことから、本発表では、義堂の文学観について、『東山外集抄』における作品理解・評価を通じて検討し、さらにその文学観が『空華集』や『空華日用工夫略集』のどこに表れているか明らかにしたい。

## 3―6　山本北山『古文尚書勤王師』執筆意図考

湯　青妹（九州大学大学院）

江戸期の儒者・山本北山が著した『古文尚書勤王師』（以下『勤王師』と略称）は、論説形式で書かれており、古文『尚書』を弁護する考証的な性格を強く持つ著作である。本書において北山は、中国の学者たちの学説を受容しつつ、独自の『尚書』研究を展開している。これまでの研究では、北山の『尚書』研究と朱彝尊・毛奇齢・閻若璩・王鳴盛など清朝考証学者の影響関係が指摘されてきた。しかし、北山がこの著作を執筆した意図については、依然として明確ではない。本発表では、『勤王師』の執筆意図に焦点を当て、北山が本書を著した動機を明らかにすることを目的とする。

具体的には、まず『勤王師』を『孝経集覧』『較定孝経』『経義掫説』など北山の他の著作と結びつけて、北山の儒学研究の全体像、およびその研究対象と学問的関心の転換を明らかにする。

次に、江戸期『尚書』研究の中心人物である大田錦城との葛藤ならびに思想的対立の構造を検討する。錦城は若年期に北山の門人となったが、北山の学問に満足できず、約一年後に北山のもとを離れることとなった。その後、錦城は『九経談』を著し、広く世に知られる存在となった。一方で、北山が著した笑話集『笑堂福聚』には、名指しこそないものの、錦城を風刺したと見られる記述が含まれており、北山が錦城の学問に不満を抱いていたことがうかがえる。こうした経緯を踏まえると、『勤王師』における北山の立場を錦城との思想的対立の視点から捉え直すことには意味があるといえよう。

さらに、北山の若年期における『孝経』研究と、晩年における『尚書』研究を対比することで、その学問的スタンスおよび研究方法の変化を明らかにする。

要するに、本発表は、北山が『勤王師』を執筆するに至った動機と背景を、研究対象と学問的関心の転換・錦城との思想的対立・方法論的変化という三側面から解明することを試みる。

## 3―7　内藤耻叟『論語』爲政篇「異端」解釈と排耶思想について

武石　智典（中国・肇慶学院）

『論語』爲政篇「子曰、攻乎異端、斯害也已。」の「異端」をめぐる注釈は、歴代の儒者の間で論争の的となってきた。とりわけ問題となるのは「異端」の定義であり、当初は字義的解釈に留まっていたものが、やがて自己と相容れぬ思想一般を指す概念へと広がった。このような中、江戸時代末期の後期水戸学では、キリスト教を「異端」として位置づけた。この理解は、明治期に生きた後期水戸学者・内藤耻叟に継承され、独自の展開を遂げる。

内藤耻叟（一八二七～一九〇三、名は正直、号は碧海）は、弘道館にて會澤正志齋および藤田東湖に学び、藩内の政争では諸生党に近い立場を取った。維新後は東北各地を転々としたのち、山形県の史生を経て帝国大学教授を務めるに至る。耻叟は『論語』をはじめとする四書や『孝経』『易経』などの経書に注釈を加え、さらに排耶書として『破邪論集』を著している。

従来、後期水戸学研究は主に會澤正志齋や藤田東湖に焦点が当てられてきた一方で、明治期における後期水戸学者、特に内藤耻叟に関する研究は、経書解釈や排耶思想の両面において十分に進んでいるとは言いがたい。しかし、西洋思想やキリスト教が積極的に受容される一方、儒教の地位が相対的に低下した明治期において、耻叟がいかにして経書解釈と排耶思想を再構築しようとしたかを検討することは、明治期における後期水戸学の『論語』解釈の特質、およびその中で展開されたキリスト教批判の思想的基盤を明らかにする上で、重要な意義を有する。

本発表では、まず、後期水戸学の『論語』異端解釈と排耶思想を整理し、続いて内藤耻叟『論語講義』における「異端」解釈を検討する。『破邪論集』をはじめとする排耶関連著作および周辺文献を参照しながら、その思想的背景、そして後期水戸学思想の継承と耻叟独自の展開について述べる。

## 3―8　木下順庵の儒礼思想について――『服制合編』を端緒として

王　怡静（関西大学大学院）

本発表は、江戸初期の儒学者である木下順庵（一六二一～一六九八）が選述に関与した『服制合編』（一六八三年編纂）を手がかりに、順庵の儒礼思想の一端を明らかにすることを目的とする。『服制合編』は、幕府が服喪制度である『服忌令』を制定するにあたり、中国の喪服制度を参照する必要があったため、木下順庵・林鳳岡・人見竹洞の三名に命じて編纂させたものである。同書は全四文献から構成され、第一文献・第四文献は林鳳岡、第二文献は人見竹洞、第三文献は木下順庵によってそれぞれ撰述されている。

なかでも第三文献は、明代の喪服制度を中心に据えて論じられ、五服（斬衰、斉衰、大功、小功、緦麻）の順に従って記述されていることが特徴である。また、中国親族の称謂に関しては、各親族が具体的に誰を指すかを明確にするため、詳細な注記が付されている。さらに、順庵は明代の喪服制度に依拠するのみならず、古代の喪服制度との比較を通じて説明を加え、喪服制度を「古ノ制」と「明ノ制」とに分類した上で、各親族関係に対応する服制を対照的に論じている。

従来の研究では、『服制合編』の成立経緯や構成に関する基礎的な紹介が行われてきたが、順庵が撰述した第三文献についてはさらなる内容分析の余地がある。本発表は、第三文献を中心に、その構成・内容を分析することを通じて、「古制」と「明制」の対照関係に注目しながら、順庵が服制の理論的体系化をどのように試みたのかを明らかにすることを目指す。

以上の検討を通じて、『服制合編』編纂過程において示された木下順庵の儒礼思想および礼制に対する学問的姿勢を再評価するとともに、幕府儒官として果たした思想的役割とその意義を改めて提示したい。

## 3―9　伊藤東涯の儒式葬儀と古義堂の人的ネットワーク――『紹述先生易簀雑記』を中心に

杜　絡嘉（関西大学大学院）

江戸時代に入ると、知識人、とりわけ儒者たちは、中国の礼に関して多くの研究を行うと同時に、その実践にも取り組んだ。伊藤仁斎をはじめとする古義堂の人々もまた、寛文期より中国の礼に関する研究を進めていた。これまでの先行研究においては、寛文期における仁斎の『家礼』研究、および延宝期における両親の葬儀や三年の喪に代表される喪葬儀礼の実践が多く言及されている。しかし、それ以降の古義堂における礼学研究およびその実践については、十分に論じられておらず、古義堂の礼学実践が等閑視されてきた現状がある。

たとえば、宝永二年（一七〇五）における仁斎の死去に関しては、記録はあまり残されていないが、現在、天理大学附属天理図書館古義堂文庫には、東涯の喪事記録である『紹述先生易簀雑記』が所蔵されており、当時の古義堂における礼学実践の実態を明らかにするうえで、極めて重要な史料と考えられる。にもかかわらず、管見の限り、これまで本資料を本格的に取り扱った先行研究は見当たらない。

本発表では先行研究の現状を踏まえ、『紹述先生易簀雑記』を主たる史料とし、これまで十分に解明されてこなかった東涯葬儀の全体像を明らかにすることを目的とする。そのことを通じて、古義堂における喪葬儀礼の特徴、さらには近世日本における儒教礼学の内面化のあり方についても考察を加える。

とりわけ注目すべきは、本葬儀において公家の参与が確認される点である。これは、当時の儒者による礼学実践が公家社会にまで及んでいたことを示す重要な事例と位置づけられよう。加えて、『紹述先生易簀雑記』には『吊簿』、すなわち弔問者の記録が含まれており、本発表ではこの『吊簿』の分析を通じて、当時の古義堂が有していた人的ネットワークの広がりおよび構造について論じてみたい。

## 3―12　空海の雑言詩における声韻表現についての考察

劉　孟磊（神戸大学大学院）

空海（七七四―八三五）は、八〇四年から八〇六年にかけて唐に留学し、その滞在中に中国の音韻や修辞など、詩の創作理論を広く収集し、後に『文鏡秘府論』を編纂した。では、中国の声律理論に大量に触れる機会があった空海は、自身の文学的実践においてこの理論体系をいかに受容したのだろうか。

空海が活動した中唐期には、近体詩の格律がすでに定型化し、主流の詩形式として確立されていた。しかし、現存する空海の詩作を検討すると、格律に厳密に則った作品は少ない一方で、『文鏡秘府論』に収録された理論を見れば、空海が近体詩の詩律に対する関心を寄せていたことも明らかである。こうした理論と実践の間に見られる乖離は、その人の詩学的意識の多層性を示すものであり、より深化した分析が求められる。

現存する空海の詩作の中には、雑言詩が五首含まれている。これらの詩は七言句を基調としつつも、句型の変化に富み、自由で柔軟な形式を備えている。こうした形式は、多様な声韻の組み合わせを可能にする一方で、七言詩行の中に、中国詩歌理論の受容の一端をも示している。このように、柔軟かつ重層的な詩律運用の実態を把握してこそ、事実に即した理解が可能となる。

また、空海は単なる詩人ではなく、嵯峨天皇の信任厚き僧官でもあった。そのため、空海の詩作は宗教的・政治的な二重の機能を備えることが多く、これらの詩における声韻構造は、内容と密接に結びつき、宗教的な役割、或いは社交の手段として機能するうえで、聴覚などへの美的効果を目指したと考えられる。。

以上を踏まえて本発表では、空海の雑言詩における声律表現そのものに基づき、拈二体（第二字／第二・第四字の黏対）・折腰体（平行の律句）・複合形式などの視点を含めながら、その規則性について再検討する。また、特別な押韻や句式の変化にも注目することで、空海の声律への自覚性と創造性を明らかにしたい。

## 3―13　服部南郭の詩作に見る『唐詩選』の受容と影響

馬　艶艶（岡山大学大学院）

『唐詩選』は、日本近世において広く流布した唐詩選集であり、その初の校訂・出版に尽力したのが、徂徠学派の文人・服部南郭（一六八三―一七五九）である。では、数ある唐詩類書の中で、南郭自身はその『唐詩選』をどのように受け止め、自らの詩作に活かしてゆくことになったのか。本発表は、この問いに答えることを試みる。

発表者はこれまでに、『唐詩三百首』『三体詩』『古文真宝』などとの比較を通じて、『唐詩選』の詩体・詩人・主題構成を定量的に分析し、その特徴と流行要因の関係を探ってきた。本発表ではその成果を踏まえ、南郭の詩作に注目し、『唐詩選』との詩体や主題の共通点を検討することで、彼が唐詩のどの要素を重視していたのか、またそれが『唐詩選』を選び推奨する姿勢にどう結びついていたのかを明らかにする。

『南郭先生文集』は全四編からなり、各編の冒頭に詩文を配し、南郭の詩・散文・書簡などを収めている。特に初篇（一七二七年刊）には、南郭が徂徠門下となった一七一一年から一七二五年までの詩作がまとめられており、『唐詩選』（一七二四年刊）の刊行と時期的に重なる点が注目される。詩作を概観すると、特定の詩体が一定の比重を占め、詩体の構成や配列に『唐詩選』との共通性がうかがえる。また、「西宮春怨」や「青楼曲」など詩題の共通が多数見られるほか、題名は異なっていても内容や主題の面で『唐詩選』収録詩と響き合う作品も確認できる。南郭の詩は、こうした共通点を持ちながらも独自の構成や表現が加えられている点に特色がある。

本発表では『南郭先生文集』初篇を対象に、詩体や主題の連関、表現上の工夫に注目し、それらの共通点がどのような背景から生じたのかを考察する。南郭と『唐詩選』の成立事情や詩学的志向を踏まえ、多角的に両者の関係を検討する。さらに、『芙蕖館提耳』や『唐詩選国字解』などの注釈資料も参照し、南郭が詩のどの側面に注目していたか、その詩学的志向を考察する手がかりとしたい。

## 3―14　日本における蘇軾「和陶詩」の流伝と創作の系譜

原田　愛（金沢大学）

北宋中後期を生きた蘇軾（字は子瞻、号は東坡居士、一〇三六～一一〇一）は、主に謫所である嶺南の恵州および海南島の儋州において、東晋の隠逸詩人陶淵明（三六五～四七二）の詩一百二十四首に和韻し、その「和陶詩」は蘇軾晩年の代表作群とされる。弟の蘇轍（字は子由、一〇三九～一一一二）も、蘇軾に促されてそのうちの五十二首に継和した。しかし、旧法党人が弾圧されていた当時の政治情勢故に、蘇軾・蘇轍の「和陶詩」を収録した詩集（以下、『和陶詩集』と略）が上梓されるまでには時間を要した。そして、北宋末から元代にかけて『和陶詩集』は出版され（散逸したものも含めて出版が確認できる版本は七種）、明代にも「和陶詩」が収録された別集が出版された。

そのうちの幾つかは日本にも流伝しており、京都建仁寺の両足院に伝わった版本が存する。そして、最も早く蘇軾の「和陶詩」に言及した形跡が見えるのが、室町初期の臨済宗の僧の義堂周信（一三二五～八八）である。また、日本でも蘇軾に倣って陶淵明詩に和韻する「和陶詩人」が現れた。その嚆矢が江戸初期の日蓮宗の僧の元政上人（一六二三～六八）であり、室鳩巣（一六五八～一七三四）、松崎慊堂（一七七一～一八八四）、藤澤南岳（一八四二～一九二〇）などの漢学者が続く。近年、そうした日本における「和陶詩」創作の様相が幾つか報告されたが、系統的かつ総括的な研究は行われておらず、詩人の意向もあってか、全集に収録されずに散逸した作もあると言われていた。

発表者は以前、蘇軾の晩年から元代までの『和陶詩集』の編纂および出版の過程を論じたことがある（拙稿「蘇軾『和陶詩集』編纂考」、『日本宋代文學學會報』第三集、二〇一七年）。本発表では、その宋元で出版された『和陶詩集』を踏まえつつ、明代における『和陶詩集』の出版と日本への流伝を取り上げ、かつ、日本の詩僧や詩人による「和陶詩」創作の系譜を明らかにしたい。

## 3―15　頼三兄弟による蘇氏兄弟詩の受容――「病中次韻雪詩」を中心に

鄭　瑞雪（お茶の水女子大学大学院）

長兄の頼春水（一七四六―一八一六、名は惟完、字は千秋）、次兄の頼春風（一七五三―一八二五、名は惟彊、字は千齢）、末弟の頼杏坪（一七五六―一八三四、名は惟柔、字は千祺）は、いずれも江戸後期に活躍した詩人であり、世に「頼三兄弟」と称される。

三人の詩集（それぞれ『春水遺稿』『春風館詩鈔』『春草堂詩鈔』）によれば、文化十三年（一八一六）、病床にあった春水が蘇軾（一〇三六―一一〇一、字は子瞻）の「聚星堂雪」に次韻して詩を作り、弟の春風・杏坪に命じて、同様に次韻詩を作らせたという。現在、春水の詩一首、春風一首、杏坪三首の計五首が残されており、本発表ではこれらを「病中次韻雪詩」と総称する。

「病中次韻雪詩」の原作である蘇軾「聚星堂雪」は、ありふれた形容表現や文字を避けて雪を詠じており、禁体詩あるいは白戦体の作と称される。蘇軾は「聚星堂雪」を作った約三十年前、弟の蘇轍（一〇三九―一一一二、字は子由）の詩（原作はすでに散逸）に次韻した「江上値雪」においても、使用を禁じた言葉を具体的に示しつつ詩を作っている。また、嘉祐七年（一〇六二）には、「病中大雪數日未嘗起」に対して、蘇轍が「次韻子瞻病中大雪」を作るなど、兄弟間での雪詩の次韻も見られる。

先行研究では、頼山陽による蘇軾受容については一定の論及があるものの、頼三兄弟による蘇氏兄弟詩の受容については、ほとんど研究が進められていない。

本発表では、「病中次韻雪詩」を中心に、頼三兄弟が蘇軾「聚星堂雪」だけでなく、蘇氏兄弟の他の関連詩作も意識していたことを検証する。次に、彼らが自らの兄弟関係を蘇氏兄弟になぞらえ、その追慕と敬意を詩作に託していた点について考察する。さらに、頼氏兄弟と蘇氏兄弟の生涯を比較し、その背景が詩作に与えた影響にも注目したい。

## 3―16　唐話資料「三字話」群に関する初歩的考察――所収語彙の異同を中心に

岩本　眞理（大阪公立大学）

本発表は、写本として継承されてきた「三字話」資料群に着目する。

一　『改正　唐韻三字話』（関西大学総合図書館長澤文庫）

二　『三字唐話』（九州大学附属図書館石崎文庫、岩田憲幸 2020 翻刻本による）

三　『三字唐話』（国文学研究資料館、岩田憲幸 2020 翻刻本による）

いずれも刊記がなく、成立時期や書写年代は不明である。二、三は、岩田氏による詳細な研究がある。この三種は共通する語彙を多く収録し、書名に「三字」を含むことから、原本ともいうべき「三字話」資料が先に存在していたと想定することも可能であろう。書写段階での語彙の取捨選択や改訂、増補、配列順位の変更、さらには誤記などに起因し、資料間の相違が生じたと見なしうる。

本発表は、この三資料に加えて、『南山俗語考』の稿本である『南山考講記』（『唐話辞書類集第』第五集所収）と比較しながら考察を進める。『南山考講記』は、明和四年の成書であり、全八冊中、後半の五～七冊は「天文時令地理、人品、親族、身体」などの分類項目による配列をなし、第八冊は君臣間の対話「君臣唐話」を収載する。注目すべきは、前半の一～四冊の部分であり、大量の「三字話」が分類項目のないままに列挙されている。

奥村佳代子 2014 は、『唐韻三字話』と『南山俗語考』の収録語彙の近似性を指摘している。本発表者は刊本『南山俗語考』の前段階である『南山考講記』との対照作業がより重要であると考える。薩摩藩が独自に収集、蓄積した「三字話」に基づいて『南山俗語考』の完成を見たとするのは妥当ではなく、すでに存在していた「三字話」資料を踏襲しつつ編纂作業を行ったものと推測する。

このほか、森嶋中良の雑記帳に「三字話」がごく断片的ながら書き残されていることや、『訳通類略』（長澤本「唐話辞書類集」第十九集所収　明治期写本とされる）の付録として、「二字話」「三字話」が加えられていることも、考察範囲に加える。

## 4―1　北朝における陶淵明の受容について

土屋　聡（岡山大学）

陶淵明（三六五～四二七）の没後、比較的早期の受容史としては、顔延之「陶徵士誄」・沈約『宋書』隠逸伝・昭明太子蕭統「陶淵明伝」という伝記類のほか、鮑照「学陶彭沢体」・江淹「陶徵君田居（雑体詩三十首）」といった模擬詩、鍾嶸『詩品』における批評、昭明太子による『陶淵明集』の編纂および「陶淵明集序」における絶賛など、南朝においては多種多様な影響や評価を見ることができる。しかし、北朝における受容の実態はほとんど未詳であり、わずかに陽休之（五〇九～五八二）による陶集編纂や祖鴻勲（生卒未詳、五五〇頃卒か）「与陽休之書」への影響が注目されるのみである。既に指摘されているように、北朝においては隠逸が許容されにくい状況にあった。したがって、陶淵明の受容が低調なものであったとしても確かに不思議はない。一方、初唐においては従来と異なる陶淵明像が発見され、新たな受容の潮流が生まれたことも知られている。それでは、北朝と初唐とにおけるそれぞれの受容状況は、果たしてどのような繋がりを持っているのであろうか。そもそも繋がり自体があるのであろうか。この点を解明することが本研究の目的である。

そこで発表者は、ひとつの試みとして、北朝および隋の墓誌における陶淵明詩文の語句の使用状況を調査した。墓誌は故人の人柄や事績の顕彰が主な内容である。そのため、襲用されている語句に着目することによって、北朝人が陶淵明のどのような点に関心を寄せていたかを窺い知ることができる。

本発表では、右の調査結果を基に、陽固（陽休之の父。四六七～五二三）「演賾賦」や祖鴻勲「与陽休之書」などの関連作品に検討を加え、北朝における陶淵明の受容のあり方について明らかにしたい。

## 4―2 白居易の新楽府における叙述法の工夫――元稹に対する唱和詩という観点から

劉　瑨旖（岡山大学大学院）

唐代の詩は歴代の古典詩の中で、最もすぐれたものとされている。その唐詩の作者の中で、中唐の詩人白居易は優れた詩才によって世に知られている人物の一人である。白居易には親友の元稹がおり、二人は交友を結んだその日から深い友情で結ばれた。白居易が「祭微之文（微之を祭る文）」に「始以詩交，終以詩訣（始まりは詩をもって交わり、終わりは詩をもって別れる）」と書いているように、貞元十八年（八〇二年）から大和五年（八三一年）に元稹が逝去するまで、二人は絶えることなく詩を唱和し続け、互いに影響を与えつつ、詩を創作し続けていた。二人が作り上げた唱和詩は無視できない存在だと言えるだろう。そして、白居易が書いた「新樂府五十首」という作品群の中の十二首はまさに元稹が書いた「和李校書新題樂府十二首」という作品群にインスパイアされ、和して結実した作品であると考えられる。詩を一読すればわかるように、同じ題目やテーマを用いて、時に似たような表現をしながらも、白居易の詩は元稹の詩に縛られず、完全に白居易独自のスタイルを呈している。

果たして、白居易は具体的にどのように元稹の十二首の新楽府から刺激を受けて和し、白居易ならではの十二首の新楽府を得たのだろうか。白居易が施したその工夫について詳しく考察することで、白居易の唱和する工夫の様相を把握する上で、一つの手掛かりにもなると考えられる。しかし、白居易の新楽府に対して、従来の研究では、白居易が「いかに和したか」について詳しい考察は行われず、また、考察が行われる場合も、対象は一部の作品のみにとどまっており、二人の新楽府全体にわたって比べたものではないと考えられる。

そこで、本発表では元稹が書いた十二首の新楽府と、それに和して作られた白居易の十二首の新楽府を対象にし、元稹の詩と比較しながら、白居易が「いかに和したか」について詳しく考察したい。

## 4―3　唐代詩格にみる正変説の展開

高崎　駿士（東北大学）

本報告は、唐代詩格文献における「正」「変」に関する言説に着目し、それが伝統的詩経学の枠組をいかに継承し、また変容させているかを明らかにすることを目的とする。

伝統的詩経学における正変説は、『毛詩』大序に端を発し、鄭玄の『詩譜』や孔穎達らによる『毛詩正義』によって体系化されたものである。この説は、『毛詩』に収められた詩篇を「正風・正雅」（治世の詩）および「変風・変雅」（乱世の詩）という視点から捉えようとする考え方である。しかしながら、唐代の詩格文献にみえる「正」「変」に関する言説は、伝統的詩経学の枠組を踏まえつつも、詩作の実践や詩学的価値判断と結びつける形で、独自の再解釈が展開している。詩経学の理論的継承にとどまらず、詩学的応用の実態を示すものとして注目される。

例えば、賈島（七七九～八四三）の『二南密旨』「論変大小雅」では、「変」とは単なる退廃ではなく、「景象移動」による比喩的批判、すなわち政治的乱れに対する詩的諷刺として解されている。また、斉己（八六三？～九三七？）の『風騒旨格』においては、「六詩」として「大雅」「小雅」「正風」「変風」「変大雅」「変小雅」の項目が挙げられており、それぞれに自身の作品や同時代の詩作を配している。ただし、解説や注釈はなく、分類の意図は明示されない。

本報告では、こうした唐代詩格文献にみられる「正」「変」に関する言説を対象として、唐代詩論との関連性、さらには、賈島・斉己らの人的ネットワークといった観点から検討する。これによって、唐代詩格文献にみえる言説が有する詩学的意義を明らかにし、唐代詩論の多様性を示す一側面として位置づけることを目指す。

## 4―4　追憶の文学――温庭筠の詩に見られる「場所」の追憶表現をめぐって

鈴木　政光（東北大学大学院指導認定退学）

中国古典詩における「場所」といえば、まず「詩跡」を思い浮かべざるを得ないだろう。現在残された情景からその地にかつて存在した史書中の人物や王朝に思いを馳せ、今昔の感慨に耽る。そうした詩歌の名作が繰り返し読み継がれることで、土地は独自の文学的イメージを喚起する「詩跡」となる。こうした詩跡を生み出す契機となる「懐古型詠史詩」の流行が中唐から晩唐にかけて頂点を迎えることは、浅見洋二氏によってつとに指摘されており（「李商隠の詠史詩について」）、温庭筠（八〇一頃～八六六）の詠史詩が同じく「懐古の構造」を踏まえることも、浅見氏の論中で言及されている。しかし、温庭筠の詩には、「懐古の構造」を踏まえ懐古詩に頻出するモチーフも使用しながら、歴史上の人物や王朝に関わらず、土地にまつわる典故を使うこともなく、自身の追憶だけを表現する作が数首残されている。本発表では、温庭筠の詩に見られる個人的な「場所」（旧遊の地・江南の故郷・亡友の故居）の追憶表現に焦点を当て、「追憶」という詩的発想の在り方が温庭筠の詩詞に見られる表現の特質と不可分な関係にあること、を示す。

温庭筠への影響がたびたび論じられている中唐の李賀（七九〇～八一六）には追憶の表現はほとんど見られず、同時代の詩人に関して、杜牧（八〇三～八五二）は七言絶句の「追憶の詩において、とくにすぐれたものがある」（鈴木修次『唐代詩人論』）が、李商隠（八一二～八五八）は「全般的に見て、自身の過去への追懐的態度というのが、全く希薄であ」（松岡秀明「晩唐詩の「夢」――李商隠と杜牧の一側面――」）る、という先行研究の指摘がある。温庭筠の追憶の詩を精読しておくことは、李賀・杜牧・李商隠の三詩人との比較研究を行う上でも有意義である、と考えられる。本発表を通じて、中唐や北宋と比べて閑却されがちな晩唐の詩の研究を今後進めていくための一視座を提供することができれば、と思う。

## 4―5　岑参の地方官意識――蜀における五言六句の懐古詩群を中心に

黒瀬　加那子（岡山大学大学院）

岑参は永泰元年（七六五）に嘉州刺史に任ぜられ、晩年を蜀の地で過ごした。本発表では、岑参が成都・嘉州滞在期に集中して作った一群の五言六句詩に注目し、その文学的意義とともに、当時の岑参における政治的・思想的な変化について考察する。

この時期、岑参は合計十首の五言六句詩を残しており、いずれも蜀の名所旧跡や歴史的事物を題材とし、過去の人々の不在や時間の流れを主題とする懐古的な内容となっている。五言六句という形式は、岑参の詩全体から見ると非常に稀なものである。しかも、内容・形式ともに統一された詩が特定の時期に集中して作られている点は、彼の詩作の中でも特異でありながら、これまで本格的な分析の対象とはされてこなかった。

本発表では、まずこれらの懐古詩群を内容によって分類・整理しつつ、「石犀」や「昇遷橋」「龍女祠」といった作品において、過去の人物や出来事を詠むだけでなく、現実の蜀の人々――すなわち地域住民へのまなざしが明確に描かれている点に着目する。その上で、「蜀人」という語の多用に注目し、岑参がそれまでの詩作では見せなかった「統治者」としての視点、つまり地方官としての自己認識を詩に反映させていることを論じる。

ここで用いられる「蜀人」という語は、単に地域住民を指すだけでなく、同時代の杜甫などにも見られるように、為政者と対置される存在としての「民」を示す語である。その語を繰り返し用いることにより、岑参が人民へのまなざしを詩において意識的に表現していたことが窺える。

以上の分析から、成都時代の五言六句懐古詩群は、単なる感傷的・追慕的な詩ではなく、岑参の晩年における詩人としての成熟、ならびに地方官としての自覚と思想的深化を物語る、重要な作品群であると結論づけられる。辺塞詩人として知られる岑参の、もう一つの側面に光を当てる試みとして、本発表は十分に検討に値するものである。

## 4―6　司空曙の詩風について――姚合『極玄集』を手掛かりに

福原　早希（筑波大学大学院）

本発表では、中唐前期にあたる大暦期の詩人、司空曙に注目し、特に姚合『極玄集』に収録されている「新蟬」、「望水」、「經廢寶慶寺」の三首を対象にして、その詩風の特色、およびその収録意義を検討する。

これら三首に共通するのは、自然や風景を描きながら、季節や時の「盛り」そのものではなく、その前後――これからその盛りへと向かうものや、もはや過ぎ去りつつあるもの――に詩的関心が置かれている点である。「新蟬」では、今年初めて鳴く蟬の第一声が捉えられ、新たな季節に移行する瞬間が鋭敏に描かれる。「望水」では、消え入りそうな夕陽が表現され、日没の寸前という過渡的な時間が抒情の契機となっている。また「經廢寶慶寺」では、荒廃した寺に残る過去の面影が、かつての栄華と現在の静謐を対照的に浮かび上がらせており、「盛り」が過ぎ去った後の余韻を見出している。こうした司空曙の詩風は、「盛り」から外れた時間に潜む微妙な情趣を掬い上げる点で、美意識の一端を体現していると考えられる。

花房英樹『白居易研究』（世界思想社、一九七一年）が指摘するように、白居易の詩には「早春」や「晩秋」など、季節の移行期を題材とするものが散見される。これは「盛り」の時期よりも、始まりや終わり、その予兆や余韻に詩的関心を向けるものであり、ここからは司空曙詩との接点を見出せそうである。司空曙詩が姚合『極玄集』に選ばれていることの意義も、こうした詩風が後の元和期の詩人に継承され、発展していく過程における中間的な役割を果たしている点にあるようだ。

本発表では、以上のような観点から司空曙詩を再考することで、従来ほとんど注目されなかった司空曙詩の特色を明らかにした上で、中唐における詩的展開をより具体的に把握する視座を提示したい。

## 4―7　中唐に出現する別号表現の詩について――徒詩における三人称視点の自己描写

柴田　寿真（早稲田大学）

中国の詩人には別号（雅号・室号・斎号）を持つ者がいる。筆者は自身の別号を自作に用いる表現行為を「別号表現」と呼び、これまで二本の論文にまとめて発表した。別号表現は、これを多用した北宋・蘇軾の時代を一つの下限とし、その展開から魏晋六朝の萌芽期、唐代の確立期、北宋中後期の発展期に区分することができる。

ところで蘇軾や欧陽脩など、北宋中後期に別号表現を多用した作家は、それ以前の作家と比べて詩での用例が比較的多い。また筆者の調査では、中唐より前に詩での用例は存在しない。おそらく宋代にまとまった数量の別号表現が現れるのは、別号表現が詩というメジャーな文体に使用できたことも関係があるだろう。そこで本発表の第一の目的は、宋代にピークを迎える別号表現の、重要なファクターと考えられる詩での使用、その淵源を探ることにある。

別号表現とは、いわば自らを客体化した三人称表現である。筆者は詩に別号表現が現れるまで長い時間を要した最大の要因は、まず中唐以前の古典詩が、三人称視点から詩人自らを語るという手法を、隠喩を除けば基本的に持たなかったことにあると考えている。その次に楽府題を始めとする歌辞文学の存在である。歌辞文学は三人称視点で語ることを基本様式とし、一人称的抒情を主とする徒詩とは視点の棲み分けがなされていた。こうした事情も、別号表現が詩に現れるまで長い時間を要した理由であろう。ところで歌行は盛唐期より一人称的な抒情を表現することで徒詩との境界が曖昧になったという指摘がある。筆者はその過程で三人称視点の描写が徒詩に流入し、別号表現が徒詩に出現したと考える。

本発表は、詩における別号表現の成立過程を明らかにするとともに、この視点が徒詩にもたらした新たな意味、すなわち詩の中に自己を客体化する視点が導入されたことで、詩的主体の奥行きや詩人の自己意識の表出にいかなる変化が生まれたのか私見を述べたい。

## 4―8〈資料紹介〉釈希一『筆勢集』概述

仲村　康太郎（京都大学大学院）

『日本国見在書目録』小学家に著録される唐の釈希一『筆勢集』が現存することは、あまり知られていない。中国伝存の文献に希一や『筆勢集』の名は記載がなく、恐らくは限られた流布と相俟って、中国では夙に佚したとみえる。日本では遅くとも平安時代前期に伝来し、爾来写本により伝えられてきた。

本書は六朝唐時代の書論八篇、すなわち「用筆法幷口決」、「用筆陣図法」、「王羲之筆勢論」、袁昂「古今書評」、「王献之表」、梁武帝「観鍾繇書法十二意」、庾肩吾「書品」、「筆陣図」を収録し、これに編者が序を冠して一書としたものである。内容の多くは既知に属するが、写本時代のテクストを保存しており、張彦遠『法書要録』、朱長文『墨池編』などに収められる同類の文献との比較対校の用に供する。また書論叢輯の成立としては『法書要録』に先んずる可能性がある。

日本国内には現在六つの伝本が確認されているが、すべて近世の写本である。『日本国見在書目録』以後近世に至るまで、本書に関する記録は乏しく、その具体的な伝承の経路や伝本の分岐についてはあまり明らかでない。今後より古い伝本の発見や新たな関連資料の出現が望まれる。

本発表ではひとまず発表者の得た知見を整理し、本書への関心を集める機会としたい。

## 4―11　陸游の連作詩について

甲斐　雄一（明治大学）

本発表では、陸游の詩の、連作という形式について考えてみたい。例えば、彼の「感旧四首、末章蓋思有以自広」（『剣南詩稿』巻三十七）という連作は、第三首までは、三峡をさかのぼる船旅や、梁州への険路を読み込んでおり、「旧に感ず」という詩題に沿うものであるが、第四首には華山という、未踏のはずの地が読み込まれる。これは「末章思ひを蓋ひて以て自ら広くする有り」に応じていると思われる。別集『剣南詩稿』が、陸游自身、あるいは息子たちの手によって編集・刊行されていることを踏まえれば、陸游がこのような連作という形式を、詩題と対応させながら自覚的に選択していることをうかがわせる。

陸游の連作詩については、かつて論じたことがある（「連作詩の精読―陸游「菴中晨起書触目」四首の分析を通して―」、二〇一七年度『研究集録』、日本中国学会）。そこでは連作詩の前半が、「目に触るるを書す」という詩題に即しながら、虚構化された私的空間を、後半が清貧な隠者への志向を詠っており、連作全体からは、陸游の士大夫としての葛藤が読み取れることを指摘した。本発表においても、連作詩の各篇に表出する陸游の感情や志向を読み取りながら、それらが、連作としてゆるやかに統合されることで生み出される複雑な重層性について考察したい。

発表者はかつて自注について、詩の本文と注釈が構築する重層性について考察した（「陸游詩の自注について」、『日本宋代文学学会報』第六集、二〇一九年）。詩に表される陸游の内面世界は、自注や詩題のようなパラテクストや、連作という形式によって、微妙な複雑さを構築している。今回は連作という形式から、その複雑な内面世界を読み解いてみたい。

## 4―12 『草堂詩餘』と明代詞人の創作姿勢――次韻に着目して

張　亜琳（大阪大学大学院）

宋代に編纂された詞選集『草堂詩餘』は、明代にはさまざまな増訂や改編が施され、新たな版が相次いで刊行された。広く流通して読まれるとともに、詞人たちにとっても最も手近で参照しやすい詞選集となっていたのである。

明代詞壇における特徴的な現象の一つとして注目されるのは、前人への追和が盛んに行われたことである。特定の詞作に対して多くの詞人が次韻することについては、すでに指摘されている。その一方で、一人の詞人が唐宋の詞全般に広く次韻するという、性質の異なる次韻のあり方も見られるが、これについてはいまだ十分に論じられているとは言い難い。本発表では、『草堂詩餘』所収の唐宋詞への次韻と考えられる陳鐸・陳如綸・陸之裘らの詞を取り上げ、この現象について考察する。

陳鐸は、成化・弘治年間の人であり、曲家として名高い。その詞集『草堂餘意』には一四七首の詞が収められており、ほぼすべてが『草堂詩餘』に収録されている唐宋詞に次韻した作である。また、陳如綸・陸之裘など嘉靖年間に活躍した太倉地方の詞人にも、唐宋詞への次韻が多く見られる。発表者の調査によれば、現存するのは陳如綸と陸之裘の詞集のみであるが、その詞序に見られる共通の創作背景から、他のメンバーを含む集団的な創作であったことが窺われる。陳如綸・陸之裘による合計一五七首の詞の大半は唐宋詞に次韻した作であり、特に『草堂詩餘』所収詞を強く意識して行われていた可能性が高いと推測される。

本発表では、陳鐸及び陳如綸・陸之裘の次韻詞と、彼らが参照した可能性の高い『草堂詩餘』の版本に収録された原作の詞とを、テキスト・内容・形式といった面から比較する。それによって、『草堂詩餘』の広汎な受容を背景にして生み出された彼らの詞の特徴、ひいてはそこから見て取れる明代詞人の創作姿勢の一端を明らかにしてみたい。

## 4―13　時と音――黄仲則詩の時間表現と時間意識

黄　嘉欣（中国・南京大学大学院）

清代の詩人黄仲則（一七四九～一七八三）は、苦難に満ちた短い人生のなかでその詩才を存分に燃焼させ、千余首の詩詞を『両当軒集』のなかにのこしている。彼の詩は生前にすでに広く認められ、乾隆朝の六十年間、詩壇に名を馳せた。近年では清代十大詩人の一人に数えられ、文学史上の評価はいよいよ高まっている。しかしながら現今の研究の多くは彼の伝記の考證、詩歌のテーマ・イメージの分類整理に留まっている。実際には多様で豊饒、極めて複雑な様相を呈する彼の詩を理解するために、わたしたちはさらに読解を深めなければならない。本発表では時間と音に関する表現から切り込み、黄仲則理解の新たな可能性を提起したい。

彼は「早凋」（「秋興」序）と記すように、自分の生命が長くないことを予期したのか、時間に対する焦燥感を抱き、そのために時間の流れに対する感覚にはとりわけ鋭敏なものがある。人間には時間を認識する器官がないと言われるように、もともと時間は捉えようがなく、無限定で漠然としている。それが彼の詩の世界では、時間の流れが「音」とともにあらわされる。それは「時間の可聴化」といってもよいかも知れない。黄仲則は典故・比喩・通感など様々な修辞を駆使して、「時間と音」を表現、そうすることによって感情の振幅を増幅する。否応なく時の流れを意識させる除夕には「倏忽たる流光　剣を吹きて過ぎ、年年此の夕　吟哦を費やす」（「辛卯除夕」）、また雁の声について「霜に和して起たんと欲す千村の杵、月を帯びて聴くが如し絶漠の笳」（「客中　雁を聞く」）とさまざまな秋の音が交響する。このように音と結びつける特異な時間の表現も、中国詩の伝統と無縁に生まれたわけではない。本発表では彼といくつかの点において共通する中唐の詩人李賀の表現と比較しながら、時間をいかに把握し、表現するか、黄仲則の特質を探ってみたい。

## 4―14　紀昀『瀛奎律髓刊誤』の「点」について

鮑　功瀚（大阪大学大学院）

『瀛奎律髓刊誤』（嘉慶五年〈一八〇〇〉）は、清代中期屈指の批評家・紀昀（一七二四―一八〇五）の文学批評の代表作である。宋末元初の方回が編んだ『瀛奎律髓』に収める約三千首の詩に対し、紀昀は「批」（評語）と「点」（圏点）を駆使し、悉く論評を加えた。しかしながら、今日において『瀛奎律髓』の定本とも言うべき李慶甲氏の集評校点本『瀛奎律髓彙評』（上海古籍出版社、初版は一九八六年）は、紀昀の「批」は収録するが、「点」を収録していない。『瀛奎律髓彙評』に拠る限り、本来『瀛奎律髓刊誤』において重要な役割を果たしていた「点」の存在は、見過ごされてしまうことになる。

紀昀は『瀛奎律髓』に収める全ての詩に「点」を附した。具体的には、まず各篇の冒頭の一番目の右肩に、四種類の「点」のいずれかを附し、それによって詩に対する総合評価の高下を示した。そして、詩の各句に対しても、五種類の「点」を句の右側に附し、句単位の評価を下した。こうして紀昀は詩の一句一句を「点」によって評価しつつ、詩全体の優劣を判定していった。約三千首の詩について、篇のみならず句単位にまで及ぶかたちで、一つ残らず評価を下すのは、中国の評点史にあって類い稀なものと言える。

紀昀『瀛奎律髓刊誤』の「批」を理解するうえで、「点」は不可欠である。「点」は、「批」が十分説明していない所を補っており、それによって「批」の意図が明らかとなる。また、「批」が附されない詩についても、必ず「点」が附されているため、読者は「点」を通して紀昀の評価を解読することが可能となる。紀昀の『瀛奎律髓』所収詩に対する見方、ひいては彼の文学批評を理解するには「批」を読むだけでは不十分である。李慶甲氏の『瀛奎律髓彙評』が組版の原因で割愛した「点」と合わせて見ることによってこそ、紀昀の唐宋詩に対する文学的知見の全容を窺うことができるのである。

## 4―15　離合詩と離合体燈謎のあわい――「離合」における修辞的実践

呉　修喆（九州大学）

雑体詩の一種として知られる離合詩は、後漢末の孔融による「郡姓名字詩」を嚆矢とし、唐代唱和詩を経て日本まで伝わり、平安期に成立した詩文作法書『作文大躰』にも記されている。孔融が離合詩に盛り込んだ諸要素のうち、一種の規範のように後世に継承されたのは「離合用字素」（いわば「パズルのピース」のような文字）の配置である。「郡姓名字詩」を例に説明すると、「漁父屈節　水潛匿方　与時進止　出寺施張　呂公磯釣　闔口渭旁　九域有聖　無土不王（後略）」のように、枠内は離合用字素であり、傍線部は離合という手法を示唆する語句（仮に「離合示唆語」と呼ぶ）である。ここにおける離合示唆語は「隠れる」「離れる」「閉じる」「なくなる」と、いずれも「離」（字形の一部を取り除く）という手法に連想される意味を持つ。後世の離合詩は、詩形上の変化はあるものの、一般的に離合用字素を各句の文頭または末尾に入れている。このような明示的な配置が定着するにつれ、本来しばしば織り込まれる離合示唆語はほとんど使われなくなっていった。離合詩が宋代以降に衰微する一因として、創作手法の陳腐化が挙げられる。

一方、離合詩の系譜を引く離合体燈謎は、示唆語の活用をとおして字素の配置を自由にし、隠喩的表現となる離合示唆語のバリエーションを大いに増やしただけでなく、ときには離合用字素を示唆語に見せかけるなど、多彩かつ大胆な修辞的実践を展開してきた。しかし、近代中国における修辞学研究では、離合用字素には注目が集まっているものの、離合示唆語については論じられていない。また、燈謎のような文字遊戯は「修辞技法の実験室」と評価されることがあるが、一般的な言語使用域を逸脱しているという理由から、研究資料として取り上げられていない。そこで、本発表では、「離合」における種々の修辞的実践、とりわけ離合示唆語の使用に注目し、レトリック分析の可能性を検討する。

## 4―16　盲目の詩人唐汝詢は如何に唐詩を読み解いたのか

静永　健（九州大学）

明末の上海に一人の盲目の詩人がいた。唐汝詢（一五六五～一六五九）は、五歳のとき両眼の光を失い、故に勉学よって科挙を受験する道を閉ざされてしまった。しかし生家が私塾であったことが幸いし、経書をはじめさまざまな書籍を聞き覚え、やがて唐詩の名作一五〇〇首余についてその解釈や語彙の出典を口述した。『唐詩解』五〇巻（万暦四三・一六一五年序刊）がそれである。彼のこの著作については、のちに清の四庫提要が「実に穴蕪多し」などと酷評し、これを存目に留めたため、今日では顧みる人が少ないようだが、発表者はこの認識は改められるべきだと思う。唐汝詢『唐詩解』は、万暦の出版の後、清に入って順治十六年（一六五九）と康熙四一年（一七〇二）の二度の再刊があり、また福建の余献可（居仁堂）による李攀龍『唐詩選』採録詩のみを抽出し、かつ蔣一葵注等を併録した『唐詩訓解』七巻なる書物もあらわれて、中国のみならず日本でも大いに盛行したようなのである。

一方、近年の我が国では視力を失った方々の自著や、またそのような方々の身体能力やコミュニケーションのあり方への新しい考察や活動記録が公刊されている。後者の著名なものは伊藤亜紗『目の見えない人は世界をどう見ているのか』（二〇一五）および川内有緒『目の見えない白鳥（しらとり）さんとアートを見にいく』（二〇二一）など。発表者はこれらの著作を手がかりに改めて唐汝詢『唐詩解』を読んでみた。すると、やはり盲目の詩人ならではの特質（空間への認識、芸術鑑賞の言語化など）において幾つか腑に落ちるところがあった。盲目の詩人が唐詩をどのように読み解いたのか、また彼の講説を聴いた明末上海の人々は、これをどのように受けとめたのか（＝なぜ出版しようとまで考えたのか）。会場にお集まりの皆様の忌憚のないご意見をうかがえれば幸いである。

## 5―1　翻訳における原文使用率と、翻訳の質の数値化について
## ――一九二〇年代から一九四〇年代における西遊記の翻訳を例に

井上　浩一（仙台白百合女子大学）

ある翻訳を紹介しようとする場合、「何を」「どのくらい」「どのように」翻訳したかを述べれば、ある程度特徴を伝えることができるだろう。底本の語句を何％程度使用して翻訳したのかを示す数値（本発表ではこれを「原文使用率」とする）は、上記三要素のうち、本来的には当然原文を「どのくらい」翻訳したのかを示すための数値である。

発表者はこれまで、江戸時代に西遊記を翻訳した『通俗西遊記』『画本西遊全伝』及び一九四〇年代に翻訳された西川満訳『西遊記』について原文使用率を調査し、底本を概ね「どのくらい」翻訳し、「どのくらい」削除したのかを明らかにしてきた。

ところが、底本の切り貼りによって簡略化の大部分が行われる明清版本間における文字数の比較とは異なり、日本語訳の原文使用率を算出する際には、「削除によってではなく要約によって簡略化された場合に原文使用率をどのように算出・表記すべきか」、「訳語が原文の語句をそのまま日本語に置き換えたものではなく別の言葉が用いられている場合どう考えるべきか」など、解消すべきいくつかの問題点が生じる。しかし、これらの問題点もある意味翻訳上の特徴であり、原文の簡略化に用いた手法や、原文からの自由度など、翻訳が「どのように」なされたのかの一端を明らかにする鍵にもなり得る。さらに翻訳者が書き加えた原文にない語句の割合（「加筆率」とする）を加味すれば、翻訳における量の面だけではなく、質の一部についてもある程度客観的に数値化して示すことができるのではないかと考えられる。

本発表では、一九二〇年代から一九四〇年代の主要な日本語訳西遊記である宇野浩二訳・中島孤島訳・西川満訳・伊藤貴麿訳・佐藤春夫訳を検討の対象とし、原文使用率・加筆率算出の実際の手順を示しつつ、そこでどのような問題が発生し、その結果や問題点から何が明らかにできるのかを示し、皆様からのご意見を賜りたい。

## 5―2 『八犬伝』における白話語彙の受容と展開――馬琴旧蔵『忠義水滸全書』を手がかりに

孫　琳浄（九州大学）

『八犬伝』に見られる白話語彙の使用について、馬琴は『八犬伝』第九輯下帙中巻第十九「簡端贅言」（天保九年〔一八三八〕）において、「六七輯に至りては、拙文、唐山なる俗語さへ抄し載て、且意訓をもて、彼義を知しむ」と記している。しかし実際には、第六・七輯における「唐山なる俗語」、すなわち白話語彙の使用はそれ以前の輯と大差なく、むしろ第八輯以降に、その語彙の量・質ともに著しく増加していることが確認される。

この現象に対して、先行研究は『絵本西遊記』（文化三年〔一八〇六〕初編刊）の影響を指摘し、『八犬伝』における白話語彙の急増は、その模倣、あるいは対抗意識によるものと論じている。こうした指摘は示唆に富むが、看過できないのは、馬琴が天保二年（一八三一）九月に、長年探して求めていた百二十回本『忠義水滸全書』を入手したという事実である。

実際、同書の入手後、馬琴がそれを精読し、抄出・校勘を行っていた記録が残されている。これは『八犬伝』第八輯起稿のわずか二か月前の出来事である。さらに、天保四年六月には、馬琴が該書の第七十二回から第七十六回に施訓を行っている。発表者が行った予備調査では、この馬琴自筆書き入れ本に記された語彙や傍訓と、『八犬伝』第九輯（翌天保五年二月起稿）で使用されている白話語彙とが一致する例が確認された（該本は現在、天理図書館に所蔵されている）。

そこで本発表では、『八犬伝』における白話語彙の使用実態を輯ごとに再整理し、馬琴旧蔵『忠義水滸全書』との照合を通じて、同書から導入されたと考えられる語彙の具体的な受容過程を検証する。そのうえで、新たに導入された白話語彙が、それ以前のものとどのように異なるかを分析することで、馬琴の語彙理解や表現意識の変化において『忠義水滸全書』が果たした役割を明らかにしたい。

## 5―3　川合仲象『本朝小説』における阿岩の敵討ちについて

劉　佳佳（岡山大学大学院）

『本朝小説』は、幕府領の備中国小田郡大江村（現・岡山県井原市大江町）出身の川合仲象（一七二八～一八〇四）によって著された漢文小説であり、寛政十一年（一七九九年）に、京都烏丸通三条下ル町の伊勢屋庄助によって印刷された。

『本朝小説』は、阿岸が夢の中で昔の恋人熊坂長半の新婦を殺害したことを発端として、物語が展開する。長半は浮気の罪により流罪となり、その途上で女性主人公・阿岩の父親坂田金時に世話になる。しかしある日、公時一家が東隣に婚宴に出かけ、長半が留守番をしていた折に悪心を起こす。長半が金を盗んでいる最中に公時一家が帰宅し、長半は恩人である金時を殺害して逃亡した。阿岩は仇敵である長半を追って、旅に出るが、様々な困難に出会い、途中で強盗にも捕らえられる。その旅の途中、長半によって息子の両作を殺された一寸徳兵と知り合う。長半の行方を突き止めた後に、阿岩・阿林（阿岩の侍女）・徳兵の三人は協力し合い、ついに長半を討ち果たす。物語の結末では閻魔王が現れ、敵討ちの無意味さを説く。阿岩が「父讎不共戴天（父の讎は共に天を戴かず）」と述べるのに対し、閻魔王は「否則相仇不可解，汝代司殺者，黄泉下獄責以待（否らずんば則ち、相ひ仇して解くべからず。汝、司殺の者に代はるは、黄泉の下、獄責にして以て待つ）」と述べ、阿岩に罪を諭す。最終的に阿岩は仏門に入る道を選ぶ。

文中に見られる阿岩の言葉「父讎不共戴天」は、『礼記』に由来し、儒教倫理において血族の敵討ちの正当性を認める思想を反映している。江戸時代の日本においては、この儒教倫理が武士道と結びつき、仇討ち制度が法的に認められていた。親や主君の仇を討つ行為は忠義・孝行の証とされ、『忠臣蔵』に代表されるように、多くの文学作品や演劇においても、美談として描かれてきたが、『本朝小説』は、物語は敵討ちを描きつつも、その行為の無意味さを説いており、反敵討ち的な思想が色濃く反映された特異な作品と言えよう。

本発表では、この結末に焦点を当てて、敵討ち行為の「無意味さ」や「虚しさ」という観点から、本作を他の女性敵討ち譚の結末と比較し、分析することにしたい。

## 5―4　明末の小説における「女侠」の状況とその意義

上原　徳子（立命館大学）

「女侠（侠女）」という語は、明の万暦年間に入り顕著に用いられるようになった。徐廣『二侠傳』、鄒之麒『女侠傳』、馮夢龍『情史』「情侠類」、潘之恒『亘史』『外紀』などには、「女侠」とされる女性を主題とした話が多数収録されている。

明末に登場する女侠像は、唐代伝奇に由来する武芸や奇術を駆使する類型と、貞節を貫く姿勢が侠とみなされる類型の二系統に大別されることが、すでに先行研究で指摘されている。また、これらの作品の出典や構造、白話短篇小説「三言二拍」における女侠像についても、個別の分析が積み重ねられている。

一方で、「侠」が本来は男性に適用されてきた概念であるにもかかわらず、万暦期に女性にも多く用いられるようになった背景や、女性のいかなる行為が「侠」とみなされたのかについては、個別作品に即した論考が中心であり、総合的整理はまだ十分とは言い難い。また、作者・編者の思想や、女侠とされた女性の行為が当時の社会的・道徳的文脈においてどのように位置づけられていたかについて、男性の侠との比較や、文献間の価値観の差異、文言と白話という文体の違いが女侠像の表現や価値づけに与えた影響を明らかにする視点も求められる。

本発表では、こうした先行研究を踏まえつつ、明末の女侠に関連した複数の文献を比較し、「女侠」という呼称が、いかなる行為と語りの枠組みによって女性に与えられたのかを考察する。併せて、白話小説において女侠像がいかなる娯楽的価値をもって受容されたかを検討し、教化と娯楽が併存する構造の中で、「女侠」という語が担った機能や、それが物語中で与えられた意味の構造を読み解く。さらに、こうした女侠像が清代以降にどのように継承・変容されたのかについても視野に入れ、「女侠」という概念の文学的展開を明らかにしたい。

## 5―5 「水性」と「火性」――明清時期のポルノグラフィーにおける欲望の再検討

陳　恵陽（北海道大学大学院）

明清時期における都市経済の発展や、「士農工商」という伝統的な階層秩序の崩壊は、当時の社会構造に大きな変動をもたらした。こうした背景のもと、「情」と「欲」をめぐる再定義と再検討は、同時期の思想と言説において重要な論点として位置づけられる。明清時期に盛んに刊行された、性行為を露骨に描写するポルノグラフィー作品群は、まさにこれらの論題を考察するための恰好の材料である。

この作品群に理論および語彙を提供したものとして、養生・登仙・子孫繁栄を目的とし、性交を手段とする性技法「房中術」が挙げられる。節度を守った性行為は健康に資するという理念を掲げる一方、女性の性的能力は男性を凌駕するとの見解も特徴的である。平安時代の医書『医心方』に一部抄録されたことによって、今に伝わっている房中書『素女方』では、「夫女之勝男，猶水之滅火（女が男に勝ることは、水が火を消すのと同じである）」と述べ、女性の危険性を警告している。

節制と放縦の間の葛藤を描く明清時期のポルノグラフィーにおいては、男性のみならず、女性の性的欲望も正面から描かれる。房中術の「水／女が火／男に勝る」というパターンは、明清時期のポルノグラフィーに受け継がれつつ、新たな意味づけがなされた。例えば、清初の小説『灯草和尚伝』では、「婦人家是水性，被火一燒，那水更熱了幾分（女は水の性質を持っており、火で温められると、水はいっそう熱くなる）」と、女性の過剰かつ破壊的な性的欲望が描写される。そこには、家庭に従属する妻・母・娘という従来の身分を逸脱し、自身の性的欲望を支配する女性像が描きだされている。

本発表では、「水性の女」と「火性の男」というパターンに注目し、明清時期のポルノグラフィーにおいて欲望、特に女性の性的欲望が社会的・文化的にどのように位置づけられたかを分析し、前近代中国におけるジェンダーとセクシュアリティの越境とその抑制の様相を考察する。

## 5―6　明清吝嗇譚にみる「汚穢」の描写の諸相

姚　依平（北海道大学大学院）

中国の笑話や諧謔小説において、古くから吝嗇家とその行為に焦点を当てる吝嗇譚がある。三国時代の邯鄲淳『笑林』には、すでにその萌芽が見られる。早期の吝嗇譚は主に官僚や貴族の生活を扱い、彼らの富裕でありながら質素な衣食住を嘲笑する内容が多い。これに対し、明代以降は一般庶民を中心とする話が増加し、描かれる生活様式にも変化が見られる。

特に明清時期の吝嗇譚には、糞便を大切に扱う「糞商売」など、汚物と結びついた新たな吝嗇家像が登場する。そのため、当時の「汚穢」観、すなわち汚物とされたもの、およびそれを処理する行為・道具・人物に対する意識が、物語を通して浮かび上がるといえる。

先行研究では、このような「汚穢」と共に生きる吝嗇家の姿を、明清時代の性や欲望の表現と関連づけ、禁欲主義の一形態とみなす指摘がある。こうした観点から、「汚穢」は身体統制や禁欲的規範を体現する表象として読み解くことができよう。

しかし、明清吝嗇譚にはさらに検討すべき点がある。第一に、明代では「汚穢」が話し言葉として多用されるのに対し、清代では登場人物の現実生活にそくして具体的に描かれる傾向がある。第二に、先行研究では主に男性の吝嗇家が論じられている一方で、女性の吝嗇家も登場しており、生活様式全体の包括的な分析が求められる。第三に、多くの作品では「汚穢」を通して吝嗇家を嘲笑・批判し、その末路は懲罰的であるが、清代の短編世情小説集『照世杯』のように異なる態度が示される作品も存在する。

本発表では、明清時期の吝嗇譚の時代背景を踏まえつつ、「汚穢」描写の特徴と吝嗇家の生活様式、そして『照世杯』の独自性を分析する。

## 5―7　漢詩制作に見る夏目漱石の「静」

薄　鋒（東京大学大学院）

本研究は、明治大正期の作家・夏目漱石がその一生の漢詩制作で「静」を表現した過程の特徴と、その生成要因を明らかにすることを目的とする。

先行研究に見る「動・静」論に基づいた思想受容の視点と異なり、本研究は漢詩制作を主軸に据え、小説や書簡などを参照すると共に、漱石自筆の漢詩草稿も研究対象に加え、未定稿や他者による添削、漱石自らの推敲などの漢詩表現の生成過程を考察した。

その結果、漱石は幼少期から「静」への偏向性を示していたが、大学進学後にはその傾向が一時的に消失した。「静」の表現が再び現れるようになったのは、熊本五高の同僚・長尾雨山による添削と詩評が詩風の形成に寄与したと考えられる。ただし、当時の「独坐」や「静坐」などの「静」の表現には、社会的な葛藤による精神的な不安が背景にあり、それが留学後さらに強まり、小説『吾輩は猫である』や『草枕』、『門』などにも共通的に描写されている。

その後、大患中で受けた胃病の「安静療法」がきっかけで、漱石は実人生での心身の安静への強い希望を持つようになり、漢詩制作もその重要な表現手段として位置付けられた。病後の漢詩制作では、心身の安静としての「静」が専ら表現されるようになり、同時期の小説とは異なる制作傾向を示している。さらに、晩年の漢詩日課と推敲への夢中は、「静」の実践とも捉えられ、「自己保護」と「自己超越」が交錯する様相を呈している。

総じて、「静」は漱石の漢詩制作における重要なモチーフでありながら、その表現過程には時期ごとの明確な変遷が見られる。その背後には、漱石自身の美意識に加え、詩友との交流や「安静療法」の影響といった複数の生成要因が複雑に絡み合っていたことが明らかになった。こうした過程は、小宮豊隆による「則天去私」の評価では捉えきれなかった、人間漱石が実人生での心身の安静と解脱を、漢詩の制作を通じて表現・探求しようとしたプロセスを反映している。

## 5―8　中国児童文学の黎明期における児童詩創作の探求――雑誌『児童世界』を中心に

汪　憶霏（九州大学大学院）

一九二〇年十二月一日、『新青年』第八巻第四期に、中国で初めて「児童文学」を提唱した周作人（一八八五―一九六七）の文章「児童的文学」が掲載され、文壇に大きな反響を呼んだ。新文化運動の高まりの中で、この「児童文学」という新たなジャンルは注目され、その創作と理論構築も積極的に展開されていったのである。こうした流れの中、一九二二年には商務印書館より、中国近代児童文学の研究及び実践面でも活躍した先駆者の一人である鄭振鐸（一八九八―一九五八）を編集者として、中国初の児童向け雑誌『児童世界』が創刊された。一九二〇年代前半の中国児童文学市場は、主に外国児童文学の翻訳作品で占められており、『児童世界』の誌面も例外ではなかった。鄭振鐸が執筆した『児童世界』創刊の辞「児童世界宣言」（一九二一年十二月三十日『晨報副刊』）でも、同誌に翻訳された作品として欧米やインドをはじめとする外国児童文学が多く採録されると述べるが、一方で日本の児童雑誌『赤い鳥』、『童話』、『コドモ』などもその対象となっていた。このように創刊当初は翻訳作品が多数を占めていたが、次第に創作も増加していく。『児童世界』は物語や知識記事のほかに、多数の児童詩を掲載し、「児童文学」創作の場を提供すると同時に、新たな詩的表現を模索する実験的空間でもあったのである。

本発表は、雑誌『児童世界』を対象に、中国児童文学黎明期における児童詩の創作と、そこに見られる外国文学の影響を考察するものである。『児童世界』に掲載された児童詩が、翻訳や模倣に依る作品から、当時の中国社会や文化的背景を反映した創作へと移行していった過程に注目したいと考えている。

## 5―9　中国法制文学の成立と展開――一九八〇年代文芸状況とジャンルの再定位を中心に

孫　平（長崎外国語大学）

一九八〇年代の中国では、法制度の整備、すなわち社会の「法制化」が進められた。ここでの「法制化」は、日本における「法律によって制度や規則を定める」という意味とは異なり、国家が社会秩序を構築し、個人の行為を教化・統制することを目的とするものであった。

この過程において重視されたのが「法制教育」であり、司法機関や国家権力機関の主導により、一九八〇年代初頭に「法制文学」と呼ばれるジャンルが登場した。法制文学は、近代の法意識を「上からの改革」として民衆に浸透させることを目的とした教育的文学であり、法制教育を遂行する手段として期待された。

しかし、法制文学は発足当初から、法制度の普及や社会主義の価値観の啓発といった政治的役割を強く担っていたため、その文学的価値には疑問が呈されてきた。また、概念の曖昧性やジャンルとしての不明確さ、そして強いイデオロギー性により、創作の自由や文学性は制限される傾向にあった。

ところが、一九八〇年代後半に入ると、読者の読書意識の多様化や文芸理念の再建にともない、法制文学内部でも創作の質的変化が生じ始めた。作家たちは、法制度の問題や社会の矛盾をよりリアルに描こうと試み、物語構造や人物造形に工夫を加えることで、文学性の向上を図った。

本発表では、一九八〇年代中国の文芸状況を背景に、法制文学というジャンルをめぐる言説を分析し、それがいかに形成され、またいかなる変容を遂げたのかを明らかにする。そのうえで、当時の文学的価値観と照らし合わせながら、法制文学に対する評価軸の変遷と、「文学」として成立しうる可能性について再検討を試みる。

## 5―14　五〇年代台湾にこだました野性の叫び声――朱西甯「黒狼」の改稿

藺　豪（神戸大学大学院）

本報告は、台湾外省人作家・朱西甯（シュ・セイネイ、一九二六年―一九九八年）の短編小説「黒狼」の複数回にわたる改稿に着目し、その過程から朱西甯の早期創作期における「野性」という美意識の成立を明らかにする。朱西甯に関する先行研究では、作品に現れる「懐郷」「反共」「軍事」といった台湾文学史の主要なイデオロギーと作家本人のアイデンティティに着目する研究が多い一方、その創作意識や審美感に焦点を当てた研究は現れてこなかった。

本報告では、朱西甯の早期創作期に発表された短編小説「黒狼」の三つの異なるバージョン――「黒子」（一九五四年、台北『文壇』所収）、および「阿狼」（一九六〇年、香港『祖国』所収）、および「黒狼」（1967年、台北『皇冠』所収）――の精読・比較により、各改稿における物語の変容と改稿方針を明らかにする。「黒子」から「阿狼」への改稿においては、物語構造および主題に顕著な変化が見られ、「阿狼」から「黒狼」への改稿では、言語表現の精錬が主な特徴となっている。改稿の特徴を明らかにした上で、さらに「黒子」から「阿狼」にみられる構造面の変化に注目する。具体的には、タイトル、冒頭と結末の描写、そして主人公の呼称の変化に着目することで、朱西甯が物語の「政治性」を徐々に希薄化させ、主人公の「野性」を際立たせていった方針を明らかにする。

また、「野性化」の改稿方針に対しては、（1）ジャック・ロンドンの『野性の呼び声』『白い牙』および魯迅作品からの文学的影響、（2）当時の台湾における政治的・社会的状況の変遷、（3）朱西甯の早期創作期の短編作品群との相互参照、という三つの視点から多角的に考察を加え、朱西甯の早期創作期に共通して現れる「野性」という審美観を分析する。

## 5―15　朱西甯『猫』に見る戦後台湾社会――人物設定と場面描写の分析を通して

宋　元祺（関西学院大学大学院）

一九六六年、中国から台湾へと移住して十八年目を迎えた朱西甯は、台湾を舞台として自身初の長編小説『猫』（皇冠）を発表した。本作は、隣り合う三つの家庭を舞台に、それぞれの家庭内の出来事や相互のつながりを描いた作品である。従来の研究では、本作は親子関係や子どもの教育をテーマとする作品として位置づけられ、朱自身もインタビューにおいてそう認めている。しかし本報告では、焦点を登場人物の設定や細部の場面描写に当ててこの作品を読み直してみたい。

一般に「反共作家」や「懐郷作家」として語られることが多い朱西甯が、最初に発表した長編小説において台湾を舞台に設定した点は注目に値する。本作で描かれているのは、中国大陸から台湾へ渡ってきた母子家庭、貧しいながらも純朴な台湾人少年の一家、そしてエリート層に属する客家人医師の一家という三つの家庭である。この構成は戦後台湾社会の縮図ともいえる。朱が当時の台湾社会をどのように観察し、理解していたのかが本作を読み解くことで浮かび上がる。

朱西甯の創作活動が初期段階から中期の実験的段階へと至る転換点に位置する『猫』を分析することで、本報告では朱の台湾社会に対する視線を再考したい。その際に、朱の眷村での生活経験や、客家人女性である劉慕沙との結婚が朱の作品に与えた影響にも言及し、さらに同時代の作家たちによる回想録も参考資料として活用し、まもなく一九六〇年代末から台湾という土地に根差した「郷土文学」が勃興してくることと朱の文学観との関係を視野に入れつつ、本作の意義を考察したい。

## 5―16　戦後初期の台湾文学における女性中心的家族史――徐鐘珮『余音』をめぐる考察

龔　月婷（名古屋大学大学院）

本発表は、徐鐘珮（一九一七～二〇〇六）の代表作『余音』（一九六一）を読み解くものである。

徐鐘珮は、一九四八年に南京より台湾へ渡り、戦後初期台湾における代表的な外省人女性作家の一人である。『余音』は、徐鐘珮の自伝的長編小説であり、上下の二部からなっている。本作は台湾文壇では「四大抗戦小説」の一つとされている。作者は日中戦争勃発前の時期から日本敗戦に至るまでの知識人女性・多頭の成長の道のりを描くとともに、ヒロインの視点より母親をはじめとする女性の人物が核である大家族の運命を語っている。

本発表では、本小説に描かれた女性像に注目し、とりわけ女性の系譜にポイントを置き、女性中心的家族史の視点から解読分析を行う。先ず、主要な登場人物の造形や人物関係をめぐって討論を進め、母娘関係を重点として、女系家族の諸相を緻密に考察する。また、従来本作の第二部はイデオロギー的表現がため比較的低く評価されてきた。しかし、政治的な観点からする解読だけでは作品の文学性を見過ごす恐れがあり、ファミリー・ヒストリーの視点より本小説を捉え、文学的価値を再評価する必要があると考える。よって、本発表では女性の世代間のつながりという切り口から『余音』の第二部を読み直し、作品におけるメタファーを読み解く。最後に、二〇年代、九〇年代の女性作家作品との比較分析を行うことにより、『余音』を女性視点の家族史的小説として現代女性文学史に位置付け直すことを試み、本作品の文学史的意義を再検討する。

以上の考察を踏まえ、本小説に描かれた女性中心的家族史の在り方を突き止めたい。また、徐鐘珮は外省人女性作家のみならず、記者、外交官の奥様、といった多重的身分を持つ人物である。このことを念頭におきながら、徐鐘珮による家族史的語りの特色を明らかにし、その上、『余音』の再評価を目指す。

## 6―5　周家所蔵目加田誠致周作人書簡等について

稲森　雅子（九州大学）

本発表は、周作人（一八八五～一九六七）ご遺族所蔵の九州大学中国文学研究室初代教授目加田誠（一九〇四～九四）発信書簡類をもとに、二十世紀半ばの日中学術関係者の交流の一端を考察するものである。

周知のとおり、目加田誠は一九三三年十月より約一年半、北京へ留学した。その全期間の記録が『北平日記』（大野城市心のふるさと館所蔵。翻字注＝中国書店、二〇一九年。中国語訳＝鳳凰出版社、二〇二二年）である。留学中に周作人とも面識を得たが、留学生仲間の濱一衛と周作人の長男豊一が旧知の仲であったことから、折々自宅を訪ねるなど親しく交わった様子も記録されている。

このほか、大野城心のふるさと館には一九三六年と一九四二年の中国旅行日記も残されており、翻字注を作成中である（「目加田誠『北京旅行日記（一九三六年）』翻刻注」一～三・「目加田誠『中国旅行日記（一九四二年）』翻刻注」上・中、『中国文学論集』第四九号・『文学研究』第一一九～一二二輯。『文学研究』は静永健氏と共著）。当該記録より一九三六年の北京滞在中に周作人と再会したことが確認できる。

最近刊行された『周作人宛日本語書簡目録（簡易版）――附購書一覧』（九州大学大学院言語文化研究院、二〇二五年）により、目加田誠書簡等七点の現存が明らかとなった。このたび、所有者のご厚意により提供された目加田誠書簡等の写真について、周家及び目加田家双方より翻字公開の了解をいただくことができた。

そこで本発表では、小川利康氏による一連の「周作人・松枝茂夫往来書簡」（『文化論集』三〇～三三・五〇号、早稲田商学同攷会、二〇〇七～〇八・一七年）、『周作人日記』（聯經出版事業股份有限公司、二〇二五年）なども参照し、発信時期を検証するとともに、交流の様子やその意義について考えてみたい。

## 6―6　沈従文の一九四〇年代作品における「不在」の構造
### ――「夢与現実」「摘星録」「看虹録」を中心に

楊　文溢（京都大学大学院）

本発表では、作中における「不在」の構造を切り口に、沈従文（一九〇二～一九八八）が一九四〇年代に執筆した三つの作品、「夢与現実」（一九四〇）、「摘星録」（一九四一）、「看虹録」（一九四三）を再考する。

この三作に共通するのは、「不在」という構造が意図的に設定されている点である。「夢与現実」では、主人公「彼女」が過去の友人からの手紙を読み返し、すでに「不在」となった彼らを想う中で、「彼女」の感情の揺らぎが描かれる。「摘星録」は一人の客が女主人を訪ねる場面から始まり、二人の親密なやり取りが描かれるが、ここには二重の「不在」が示されている。すなわち客が去って主人がひとり残される場面という物語内容における客の「不在」と、「後記」に見える「語り」から退いた作家の姿に示される、物語行為における「不在」とが、重ね合わされている。また「看虹録」は三つの節から成り、語り手の「私」が梅の香に導かれて一つの部屋に入る場面から始まる。第二節では女主人と客の対話が描かれ、第三節では「私」が自宅に戻り、体験を明け方まで記録していたことが語られる。ここでも、親密なやり取りの後に主人がひとり残され、客の手紙を読むという場面と、「私」が一夜の出来事を言葉にしようとするものの、すでに「不在」となった人物や情景が「失われた何か」として語り手の前に浮かび上がるという、二重の「不在」が描かれている。

この三作では登場人物は常に「不在」に思いを巡らせ、感情を揺さぶられている。注目すべきは、こうした「不在」の構造が「柏子」など一九二〇年代の作品にすでに現れている点である。本発表では、沈従文が繰り返し描いてきた「不在」の系譜を整理し、一九四〇年代の作品をその流れの中に位置づけることで、「不在」という構造が彼の後期における「抒情」言説を考察するうえでの新たな視座を提供しうることを明らかにする。

## 6―7　鏡に見る美と歴史と文献――沈従文『唐宋銅鏡』の内容と性格

福家　道信（大阪大学）

『唐宋銅鏡』は一九五八年に沈従文が出版した物質文化史研究の最初の専著であり、直前に出版された『中国絲綢図案』（共著）、六〇年の『龍鳳芸術』、文革後の『中国古代服飾研究』等との関連で言えば、彼の後半生の第一歩を印象づける重要な業績に違いない。ただ青銅鏡の形態と図像紋様の歴史を取り扱った専門書という性格からして、文学研究者からすれば敷居が高く、一方、考古学者にとって、沈従文の前半生における文学と美の問題を念頭に、この書物の内容や基本的性格を取り上げるのは専門領域外のことになりかねないのではないかと推察される。そもそも沈従文自身もこの書物について家族や友人に多くを語らず、兄沈雲麓への書簡で触れているものの素気ない。しかし写真による図録資料集としてほぼ同時期に出版された四川、湖南、洛陽、陝西の出土銅鏡の図録と対比すれば、『唐宋銅鏡』は正倉院鏡など伝世の優品を含めて代表的な鏡を通史的に紹介している点に特性があり、図像の選択には紛れもなく彼の審美眼と見識が反映され、「題記」を読めば、春秋戦国期以来、宋代に至るまでの鏡の歴史と文化が濃密に凝縮されて記されており、彼の鏡への没頭ぶりが伺われる。書物としての構成は「題記」、唐代と宋代の鏡の図像、附録として戦国期、秦漢以降の鏡の図像および若干の関連資料から成る。「題記」の内容は上述のように多岐にわたり一括して論じにくいが、興味深いことにそれの末尾に図像資料の出処として『東瀛珠光』『支那蒐儲古銅精華』『古鏡聚英』など日本の主要な図録書が明記されている。実際、対照してゆけば本書収録写真の唐代までの大半が日本資料からの転載である。彼の日本考古学への注視と資料の引用は実は鏡に限ったことではなく『中国古代服飾研究』にも及ぶ。版本の問題として『沈従文全集』二十九巻収録の『唐宋銅鏡』には鏡の図像に彼がつけたメモも活字化され、鏡と向かい合う姿が一層鮮明である。

## 6―8　田漢における厨川白村文芸思想の受容

閻　瑜（お茶の水女子大学）

厨川白村の著作は、一九二〇年代初頭にはすでに中国で紹介・翻訳されており、当時の中国知識人の間で広く読まれていた。中でも『苦悶の象徴』は、中国において最も大きな影響を与えた外国文学理論書の一つとされ、厨川は中国近代文芸理論の形成において重要な役割を果たした日本人文芸理論家として位置づけられている。

従来の研究は主に魯迅や郭沫若への影響に焦点を当ててきたが、彼らに先立って厨川の著作に注目していた田漢による受容については、十分に検討されてきたとは言いがたい。現存するわずかな先行研究も、その影響を『苦悶の象徴』にほぼ限定して論じており、他の著作からの影響にはほとんど言及されていないのが現状である。

中国新劇運動の先駆者である田漢は、一九一六年から一九二二年にかけて日本に留学し、その間、多くの新聞や書籍を読み、新劇や映画を頻繁に鑑賞するとともに、日本の文人たちと広く交流を持ち、新劇の創作および上演を開始していた。一九二〇年三月には厨川白村を訪問しており、同年に発表した論文や友人宛の書簡では、厨川の『近代文学十講』や『文芸思潮論』における議論が頻繁に引用されている。さらに、日本滞在中に執筆した戯曲「珈琲店の一夜」などには、厨川の文芸思想の影響が色濃く認められる。また、帰国後に発表した評論にも『象牙の塔を出て』の影響がうかがえる。田漢が受けた厨川の影響は、『苦悶の象徴』にとどまらず、『近代文学十講』や『文芸思潮論』をはじめとする複数の著作に及び、時期に応じて多面的に展開されていたと考えられる。

本報告では、田漢の初期戯曲・論文・書簡、ならびに友人による回想記録を分析対象とし、魯迅や郭沫若といった同時代の文学者に対する厨川白村の文芸思想の影響との比較を通じて、田漢の創作理念の形成過程における厨川白村の思想的影響を明らかにすることを目的とする。

## 6―9　近代ジャーナリズム体制下における詩話の変容

楊　婷婷（大阪大学、同志社大学）

近代に入り、新聞や雑誌といったジャーナリズムが確立すると、伝統的な文学形式である詩話もその体制へと組み込まれてゆく。新聞や雑誌は、基本的に何らかの編集方針のもとに編集・発行される。詩話もまたその影響を強く受け、前近代の伝統的な詩話とは大きく異なるものへと変容していった。本発表では、当時の最有力紙『申報』に掲載された詩話に即して、特に次の三点を指摘したい。

（一）編集者の影響。一定の期間を経て編集者が交代し、その編集方針の違いによって詩話の傾向に変化が生じた。例えば、王鈍根が編集を担当した時期には、ユーモアを強調した「滑稽」を基調とする詩話が多く見られ、周瘦鵑が担当した時期には、鴛鴦蝴蝶派風の「感傷」を基調とする詩話が多く見られた。

（二）特集テーマの影響。特集欄が設けられ、詩話の内容も特集のテーマに沿うことが求められた。例えば、「小説特集」に掲載された詩話では、小説作品の中に用いられた詩が取り上げられ、「中秋」などの祝祭日の特集号に掲載された詩話では、当該の祝祭日を詠じた詩が取り上げられた。

（三）商業主義（コマーシャリズム）の影響。近代ジャーナリズムを成り立たせていた商業主義は詩話の性格を大きく変えた。例えば、株価情勢をめぐって書かれた『投機詩話』や、毛皮商品の広告を企図して書かれた『雪窓詩話』などに代表されるように、本来の役割である文学評論を放棄し、時事評論・商業広告へと向かうケースも生じていた。

前近代の伝統的な詩話は、作者の内的な文学的関心に基づいて自由に綴られるものであった。ところが、近代ジャーナリズムの体制に組み込まれた詩話は、新聞・雑誌の経営に関わる商業主義や、その影響下にあって編集者・編集部が示すさまざまな編集方針の制約を受けざるを得なかった。これは詩話にとって創作の自由を奪うものであった。だが、その一方で新たな主題や観点を獲得する契機をもたらすものともなったのである。

## 6―11　科学を担う他者たち――清末科学小説における自他関係の表象分析

武　小萱（岡山大学大学院）

一八四〇年以前の中国において、政治的・文化的主体を「士紳階級とその予備軍としての知識人層」と設定した場合、民族や性別、学問の正統性や統治権、日常に浸る言説、表現、環境などの面においてそれに相対するものを「他者」と定義することが可能になる。清末の科学小説を見ると、これらの「他者たち」に当たる人物が科学小説の文脈において、科学の応用、科学器具の発明を担う実例が存在する。その典型的な例として、清代小説『野叟曝言』の翻新小説である『新野叟曝言』を挙げることができる。

『新野叟曝言』の主人公・文祎は中国人と「欧産」（欧州・ポルトガル人）の血を混じって生まれた混血児である。作中、彼は身体的・文化的「越境性」を体現した人物となり、先進的科学の発展、中国復興の未来、多国家多種族を包摂する大同世界の実験場の建築などの担い手として描かれている。

清末小説の物語構造において、このような越境性のそなえた「新たな主体」の誕生は、従来の枠組みにとらわれない斬新かつ独自性の高い試みであるため注目に値する。『女媧石』の女性革命家主人公、『月球植民地小説』のキーパーソンの女性科学者の出現や、『電世界』で異彩を放つ発明家・起業家など、従来の文化的・政治的主体から離れた他者たちがその主体を握り、中国を科学の新世界に誘い込む物語が誕生した。

のみならず、清末の科学小説ジャンルでは、甄宝玉が裏で大活躍する『新石頭記』や、宗主国としての「震旦」が人類の保種任務を担う『氷山雪海』など、元来の主体を反転させた「逆説的な主体」の存在も確認できる。

本論では、それらの作品例の分析を踏まえながら、清末科学小説における「混血」「異族」「他者」の表象のあり方を分析し、他者の存在によって可能となる同時代の民族的主体性の再構築、およびその中で浮かび上がる「反植民地主義」的な意識の形成を探る。

## 6―12　影戯小説の空間構造について――「ポンペイ最後の日」を例として

林　雨璐（お茶の水女子大学大学院）

本発表は、周瘦鵑（一八九五―一九六八）による影戯小説「ポンペイ最後の日」を対象とし、映画から小説への翻案にともなう空間構造の変容に注目する。

「影戯小説」とは、文人たちが映画を鑑賞した後、小説として再創作した文学ジャンルであり、既成の脚本に基づくのではなく、作者の記憶に依拠して再構成された形式である。周瘦鵑は計十一篇の影戯小説を執筆しており、影戯小説の発展に大きく寄与した作家と考えられている。

一九一五年に『礼拝六』に発表された「ポンペイ最後の日」は、その代表作として知られ、これまでにも一定の研究が蓄積されてきた。しかし、物語論の観点から、映画から小説への空間構造の変容に焦点を当てた先行研究はほとんど見られない。さらに、物語論においては、空間に関する理論は断片的にとどまり、方法論的な整理が不十分であるとの指摘があるが、空間が時間的テクストにおける表現・転換、および空間構造が物語全体の構築に関与する方式についても、依然として多くの課題が残されている。

本発表では「視覚メディア（映画）の空間が、時間的言語テクスト（小説）へと転換される際に生じる構造変化」に着目する。具体的には、「ポンペイ最後の日」とその影戯原作 *the last days of Pompeii* を分析対象とし、小説と映画における空間構造の差異を物語論の観点から検討する。とりわけ、人物の移動、視点の転換および語り手の介入という三つの切り口から小説と影戯の空間構造に注目し、小説における空間が言語テクストとして再構成されるプロセスを明らかにさせ、また、近代中国における西洋視覚文化の受容と小説構造のあり方を空間の観点から再考し、周瘦鵑の影戯小説が当時の小説形式および空間構造に与えた影響を明示することを目指す。

## 6―13　魯迅「祝福」を読み直す

李　慕遥（大阪大学大学院）

本発表では、先行研究が多く蓄積されてきた魯迅の短編小説「祝福」（一九二四年）を対象として、語りの構造、名付けの暴力性、さらには狂気・伝染と民族心理との連関といった複合的観点からの再読を試みる。

まず、本作が他者の伝言を通して構築されているという点に着目し、「祝福」における語りの特徴を整理する。このような語りの形式は、物語の内部に潜在する語り手の欲望や無意識的立場を浮かび上がらせる契機となる。次に、自らの声を奪われたサバルタン的主体である祥林嫂に焦点を当て、彼女の経済的困窮や空間的移動にまつわる問題を視野に収めながら、女性の抑圧とその構造的背景を考察する。

本作の舞台である魯鎮は、近代化の道を閉ざされた伝統的な共同体として描かれており、それは同時に、魯迅が見出した近代中国の構造的矛盾の縮図でもあると言える。前述の特徴を有する本作を、ル・ボンの『群衆心理』（桜井成夫訳、講談社、一九九三年）を手がかりとして読み直すことで、「遺伝」や「伝染」といった病理的メタファーが、集合的無意識に基づく民族性の暗部と結びつき、魯迅がいかにして負の共同性としての近代中国を描出しようとしたのかを明らかにする。

さらに、フーコーの『狂気の歴史』（田村俶訳、新潮社、一九七五年）を参照しつつ、翌年に発表された寓話的短編「賢人と奴隷とバカ」（一九二五年）を補助線としながら、「祝福」における狂気の表象について検討する。「奴隷」が囚われている価値の体系そのものを破壊しようとする存在として、祥林嫂は「馬鹿」の立場に重ねられる。彼女の「家出」という行為は、一見無謀で不可解に見えるが、既存の価値や秩序を揺るがす潜在的な「抵抗」として位置づけられうる。その意味で、祥林嫂の狂気は、理性と知性に基づく近代知識人の限界と盲点を照射する装置として読解することが可能である。

## 6―14 『吶喊』――《声》の構造と狂人の言葉

黄　嘉慶（東京大学大学院）

魯迅は日本留学期から晩年にかけて国民の主体性に強い関心を抱き、その表象の一つが《心声》という概念である。従来研究は主に《心》という内面からこれを解釈してきたが、《心声》とは何より《声》の問題であり、不可視な《心》をいかに《声》として表現するかが核心となる。本論は『吶喊』における《声》の描写、とりわけ民衆と狂人の発話構造を分析することで、魯迅の主体性論の位相を明らかにする。

第一章では「破悪声論」（一九〇八）に遡り、《心声》の特質を検討する。魯迅は独立精神の確保のために《心声》の重要性を説くが、その内容よりもむしろ、論理的構造をもち不変性を備えた《声》としての特徴に重点を置く。本章は、魯迅が《心声》と見なす基準をこの「不変性」にあると位置づけ、論理回路の有無により《心声》《無声》《喧騒の声》の三分類を導出する。

第二章では『吶喊』に描かれる民衆の《声》を分析する。魯迅は民衆が理性や一貫性を欠いた《声》しか出せないという限界を描く。それらの《声》は論理構造を欠き、常に前提が崩れ変化し続けるため、不変性を持たず《心声》にはなりえない。《無声》として扱われるこれらの発話構造には、魯迅の国民批判が刻まれている。

第三章では「狂人日記」に注目し、白話本文と文言序文における《声》の差異を論じる。狂人の《声》もまた論理的整合性を欠き、《心声》でもなく、『新青年』的な科学理性にも与しない。他方、序文の《声》は形式的には条理性を有すものの、他者を軽薄に断罪するため《心声》ではない。魯迅は白話の《無声》と文言の《喧騒の声》のいずれにも批判的であり、ここには『新青年』派、特に銭玄同・胡適らへの異議申し立てが表れている。

## 6―15　丸山昇の鹿地亘に対する"朝花夕拾"――日本における「革命人魯迅」再考

胡　勝（名古屋大学大学院）

丸山昇（一九三一～二〇〇六）は、一九五〇年代には鹿地亘（一九〇三～一九八二）の魯迅論を高く評価せず、さらに「日本における魯迅」をまとめる際には鹿地亘に触れなかった。しかし、晩年は鹿地亘に関心を示し、鹿地亘と魯迅との付き合いをめぐる実証的研究を行い、「鹿地の仕事は、やはり魯迅研究史の上にきちんと位置づけておくべきものだ」と述べた。

鹿地亘は戦前日本プロレタリア文学運動の重要な担い手であり、日中全面戦争勃発の前夜に上海に亡命し、最晩年の魯迅に親炙し、左連の解体や「二つのスローガン」論争に立ち会い、上海文壇の紹介文や魯迅との会見記などを日本の雑誌に発表した。魯迅逝去後、『大魯迅全集』の訳者として魯迅の「雑感」と呼ばれた仕事と散文詩集『野草』の日本語初訳を完成させた。さらに魯迅からもらった版画集や『大魯迅全集』を中野重治に送り、中野重治の魯迅受容の「触媒」となる。『大魯迅全集』所収の「伝記」（一九三七）をはじめとし、鹿地亘は『魯迅評伝』（一九四八）、「魯迅と毛沢東」（『近代文学』計十三回連載、一九六一～一九六二）などの「魯迅論」を発表した。精力的な活動にも関わらず、鹿地亘の魯迅論はこれまでの日本魯迅研究ではほとんど看過されてきた。しかし、鹿地が構築した魯迅像における「転換」への拒否、雑感への注目、戦後日本文壇の「政治と文学」論争を背景に独自な「革命―文学／政治」論の提起は、丸山昇の「革命人魯迅」との親和性を示している。

本発表は、前述した丸山昇の鹿地亘に対する"朝花夕拾"を手がかりに、鹿地亘の魯迅論を「プレ竹内好」時代に生まれた魯迅論と位置づけ、日本における「革命人魯迅」の系譜を再考しようとするものである。さらに鹿地亘の魯迅研究における「不在」に注目し、日本魯迅研究の「脱政治化」に到る道と、「再政治化」の可能性を論じたい。

## 6―16　戦後日本における魯迅像――「世界文学」装置を視座とした試論

黄　詩琦（中国・中山大学）

戦後日本において魯迅の位置付けについて、趙京華は、敗戦を契機に「日本人が自国の近代史を反省し、植民地支配への抵抗を経て独自の近代化を遂げた中国と、その精神的象徴である魯迅に注目した」と述べ、魯迅が思想・文学・歴史の問題を交差させる思索の場の中心に据えられたことを指摘している。しかし、魯迅が戦後直後の日本でいかにして（再）発見され、知識人および大衆の視野に入ったのか。その背景には、「世界文学」という装置の媒介的役割があったことを見逃してはならない。

日本では一八九〇年代以降、国民文学を基盤に世界文学を捉える主体的な視座を築いてきた。他国文学の摂取を通じて国民文学の更新を遂げ、『世界文学全集』の刊行に代表されるように、世界文学の受容は戦前・戦後を通じて継続された。本発表は、戦後における魯迅と世界文学をめぐる議論を通じて、魯迅という「他者」が日本という文化的主体に受け入れられる過程に潜む複雑性を明らかにすることを目的とする。

魯迅が日本の世界文学全集に初めて登場したのは、一九五四年に新潮社が刊行した『現代世界文学全集』であった。戦後に刊行された同全集は、戦前に見られたフランス近代文学を中心とする西洋文学偏重の傾向を脱し、魯迅、茅盾、丁玲、趙樹理ら中国の現実主義文学を積極的に取り上げた。その背景には、一九四六から一九四八年にかけて『近代文学』、『人間』や『文学時標』などの文藝誌で開催された「世界文学」座談会における中国文学の再評価があった。とりわけ、竹内好・武田泰淳ら中国文学研究会のメンバーによる「東方文学における世界性と地方性」座談は、この問題をめぐる重要な議論の場となった。このような出版と世界文学論の高まりの中で、竹内好は一九四八年に『阿Q正伝』の世界性」を執筆し、魯迅の人道主義に世界文学としての普遍性を見出したが、同時に『近代文学』やマルクス主義文学者の中国文学論には批判的であった。本発表では、戦前の国民文学・世界文学論を踏まえ、戦後竹内好が提起した「国民文学論争」における世界文学の位置付けを検討する。

## 企画展示「九州大学一〇〇年の中国学研究」

会　場　九州大学 伊都キャンパス フジイギャラリー

期　間　二〇二五年十月六日(月)～十一月二十八日(金)、午前十時～午後五時

土・日・祝休館ですが、十月十一日(土)・十二日(日)・十三日(祝)は特別に開館

入場無料

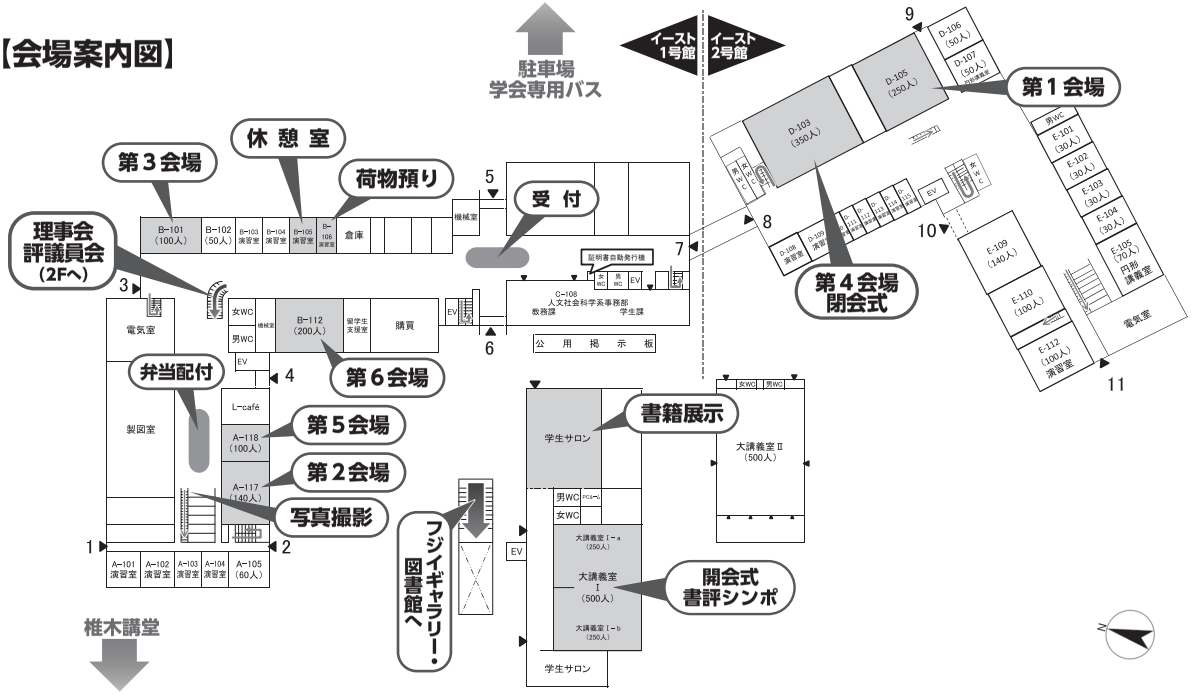
ギャラリー・トーク　十月十二日(日)午後一時より三〇分間　講師＝九州大学中国文学講座　静永　健

予約不要　会場に直接お越し下さい

日本中国学会大会開催を記念して、本学図書館が所蔵する中国学に関するさまざまな文献や研究資料、稿本などを展示いたします。所謂「九州大学本」として知られる朝鮮古写徽州本『朱子語類』や『三国志伝』二十巻本などを展示いたします。また、本学の国語学講座の初代教授で訓点学の基礎を築いた春日政治(まさじ)名誉教授そしてご子息で同じく国語学の春日和男名誉教授二代が所蔵されていた古訓点写本「金光明最勝王経」が、今年重要文化財の指定を受けました。この一巻も日本中国学会の開催にあわせて期間限定で特別公開されることになりました。

詳しくは左下のQRコードよりフジイギャラリーHPをご覧ください。

## 【会場案内図】


駐車場
学会専用バス
イースト1号館
イースト2号館
第1会場
第2会場
第3会場
第4会場
閉会式
第5会場
第6会場
休憩室
荷物預り
受付
理事会
評議員会
(2Fへ)
弁当配付
写真撮影
書籍展示
開会式
書評シンポ
フジイギャラリー・
図書館へ
椎木講堂
B-101
(100人)
B-102
(50人)
B-103
演習室
B-104
演習室
B-105
演習室
B-106
演習室
倉庫
機械室
電気室
製図室
女WC
男WC
EV
B-112
(200人)
留学生
支援室
購買
L-café
A-118
(100人)
A-117
(40人)
A-101
演習室
A-102
演習室
A-103
演習室
A-104
演習室
A-105
(60人)
C-108
人文社会科学系事務部
教務課
学生課
証明書自動発行機
公用掲示板
学生サロン
大講義室Ⅰ-a
(250人)
大講義室
Ⅰ
(500人)
大講義室Ⅰ-b
(250人)
大講義室Ⅱ
(500人)
D-105
(250人)
D-106
(50人)
D-107
(50人)
D-103
(350人)
D-108
演習室
D-109
演習室
E-101
(30人)
E-102
(30人)
E-103
(30人)
E-104
(30人)
E-105
(70人)
円筒
講義室
E-109
(140人)
E-110
(100人)
E-112
(100人)
演習室
N

# 託児所のご案内

日本中国学会第77回大会では期間中（2025年10月12日～13日）、お子さまを同伴する参加者のために託児室を設置いたします。託児室のご利用を希望される方は、以下の規定を予めご確認のうえ必ず事前にお申し込みください。

**利用資格**

日本中国学会第77回大会の参加者を保護者とするお子様

**託児時間（予定）**

10月12日（日）　9：30～17：15
10月13日（月・祝）　9：30～13：30

**対象年齢**

０歳（３ヶ月以上）～小学２年生までのお子様

**託児場所**

学会会場内
※セキュリティ確保のため、お申込者にのみご案内いたします。

**委託先**

株式会社テノ．コーポレーション

**託児料**

無料　託児室の基本利用料は大会にて負担いたします。
必ず本大会の参加申込をお済ませの上、お申し込みください。

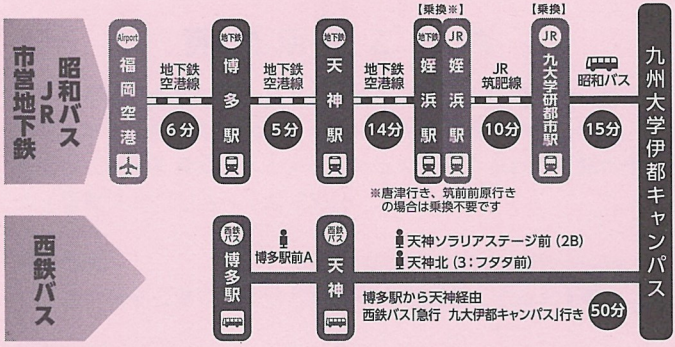
**申込方法**

以下のQRコードを読み取りの上、専用お申込みフォームにて**９月２０日（土）**までに利用予約を行って下さい。
その後、事務局より連絡票と規約・同意書をメール送付致しますので、ご記入のうえメール添付にてご提出頂く流れとなります。

【託児所利用申し込みフォーム】
https：//forms.gle/yjrcsbmqLphSvX5a7

**問い合わせ先**

大会準備会事務局
2025japansinology@gmail.com




**【大会会場】**

九州大学　伊都キャンパス（イースト 1, 2 号館）

**【アクセス】**

**○地下鉄・JR 筑肥線・昭和バスを利用する場合**（福岡空港、博多駅、天神から）

「九大学研都市」駅で昭和バスの行先番号「1, 2A, 3」に乗車。1, 3 番は「九大ビッグオレンジ」で、2A 番は「九大中央図書館」で下車。

※初日、２日目ともに、九大学研都市駅 9：11 発の学会専用無料バスを運行します。福岡空港 8：25 発、博多 8：31 発、天神 8：36 発の福岡市営地下鉄（JR 直通「筑前前原」行き）に接続します。

**○西鉄バスを利用する場合**（博多駅、天神から）

JR 博多駅（博多口「博多駅前 A」乗り場）、または天神（「天神ソラリアステージ前 2B」乗り場）で行先番号「急行 K」に乗車、「九大ビッグオレンジ」で下車。

●お帰りの際は、「九大センターゾーン入口」バス停で各社バスにご乗車いただけます。また、学会専用バスについては要項２頁を御覧下さい。

〒819-0395　福岡市西区元岡744
九州大学　言語文化研究院

**日本中国学会第77回大会準備会**

E-mail　2025japansinology@gmail.com